
幽霊なのにキューピット気取り

ATURA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊なのにキューピット気取り

【Nコード】

N5108C

【作者名】

ATURA

【あらすじ】

ある日出会った幽霊の少女「こころ」、その少女が縁結びの神にキューピットなるために、天才高校生「麗治」は自分の恋はそちのけでカップル作りに奮闘する。ほぼ100%天然幽霊こころとクールガイ麗治が、周りの恋人達のキューピットになります！

第1話「幽霊との遭遇」(前書き)

主人公と幽霊の恋はありませんのであしからず。

第1話「幽霊との遭遇」

俺の名前は沖田麗治、高校1年生の極普通の優秀な学生だ。人より頭が優れているのか成績は学年トップ。

自分で言うのもなんだが、礼儀もわきまえてあり、常識もある。家も極普通の家庭であり、姉と兄がいる5人家族。

別に心に傷を負っているわけでもない。

精神は良好、身体も異常なし。

ちなみに今いる場所は家の近くの公園。

勉強が一段落したため散歩しにきたのだ。

夏の暑い時期だが、木陰の下に座ると心地よい風が吹いた。

自分は正常だよな？

この暑い時期でもカップルは存在している。

アイスを食べながら会話をしているカップルがちょうど噴水の囲うコンクリートに座っていた。

で、そのカップルの彼女の隣に座っているなぞの少女。

最初は特に気にしていなかった、カップルのどちらかの兄弟だと思っていた。

変だといえば変だが他人の事である、第三者を連れるとは、図太い神経のカップルだと思いつつ

さてそろそろ帰ろうと思ったときだった。

はて、あの少女はなぜ浮いている？

白いワンピースに白いサンダル、黒のショートカットで可愛い顔の

少女は、

見事に浮いていた。

そんな馬鹿な、地球上には重力と言われる力が存在し人間は生身ではその力に対抗できない、

ジェットエンジンでもあれば浮けるだろうがああの浮きようはその類ではない。

幽霊か！？

おそらくその結論にたどり着くまで麗治はそう時間をかけなかった。魂、靈魂、人間の死んだ後未練があると残ると言われる非科学的な現象、

世界各地で目撃例や体験談が数多くあるがその実態はつかめていない。

とにかく麗治は関わることを避ける事にした。

一般的にそういうオカルトものには呪いがつきものだ。

変にとばかりは受けたくない。

そう思っていたとき、

幽霊と思われる少女は地面に足をつけカップルの前に立った。

そのカップルの二人とも気づいた様子が無いという事はやはり幽霊である。

ふと八子が寄ってきた。

カップルの彼女の方の肩の辺に止まる。

幽霊の少女がそれに気がついたようだ。

八子を追い払おうと彼女の肩を押す。

力が強すぎたようだ、彼女は噴水に落ちる。

それで彼氏が笑ってしまう。

ん？彼女が怒っているようだ。

おやおや喧嘩をはじめてる。

あ、怒ってどちらも逆方向へ行ってしまった。

一人残る幽霊少女・・・。

正直あの少女が見えなければ爆笑で終わっていただろう。

あれ？・・・少女が泣いている・・・。

理由はわからないが、あのカップルを破局させた責任でも感じているのか？

ついじっと見つめてしまった。

少女が視線に気が付いた。

目と目が合う・・・。

やばい！

すぐ視線をそらしたが・・・。

ちらつと少女のほうを見る。

「あ！やつぱり」

一瞬心臓を止めかける麗治、
そして硬直、

いつのまにか目の前にいる少女。

「・・・あれ？もしもし？」

ここで返事をしたら見えるとばれる、
いや、もつばれてるか、

幽霊に対する護身法・・・なんてものないな。

殴る？・・・いや、一応女の子だし、ってゆうか殴れるのか？

確かさつき人との接触はあったな、じゃあ殴れる！？
いや、そんな事をしたら幽霊を怒らせてしまう、
・・・・・・走って逃げるしかないな。

結局考えついた事はなんとも情けない作戦だった。
スポーツは人並みのためビクリするほどよくないが悪くも無い。
すぐさま立ち上がり後ろへ逃げた。

「あ！まっつてよお」

幽霊とは思えない情けない声が後ろに聞こえる。
早速公園の外へ出る。
右へ曲がり車の通らない道をダッシュする。

逃げ切れたか！？
だいぶ走ったはずだ、暑いため体力の消耗が激しい。
ふと後ろを振り向く。

「あ、やっぱり見えるんだあゝ」

頭上からの声にびびる麗治、
ああそうだ・・こいつ浮かぶんだっただけ。
ふと上を見上げれば、そこには変に愛らしい可愛い笑顔の幽霊がいた。

それがこいつとの出会いだった。

第2話「キツネ様」

「ねえねえ！見えるんでしょ！」

「・・・・・・」

憑いてくる幽霊、

仕方なく麗治はある場所へ向かっていた。

団地の道を通り、なじみの神社へ。

霊堂神社

「どうだ、成仏できそう？」

おもむろに俺は成仏祈願をした。

「うゝゝゝん、無理です」

歳はおそらく中学生、もしかすると同年代かもしれない。

「だめか・・・・なにか未練とかは？」

「・・・・それが・・・・思いつきませゝん」

幽霊とは思えないはじけっぷり。

「はぁ、なにかいい方法は」

「あ、あの人に聞いてみたら？ほらあそこにいる」

そういつて指を指した方向は誰もいない鳥居。

「なに言つてんだよ、だれも・・・・まさか」

ふと引つかかった考え、

もしかして別の幽霊では！

「おい！お前の見えるのって・・・・あれ？いない？」

さつきまで隣にいた少女がいない。

「あゝ、ちょっといいですか？」

何時の間にか鳥居のところで独り言を言っている少女。

「まてまてまて」

止めに入る麗治。

「へ？なんでしよう？」

「幽霊に聞いても仕方ないだろ」

「え？幽霊なんですか！あの人」

「そもそもお前が幽霊なんだよ！受け答えできておかしいって思わなかったのか！」

「ああ」

「どうやら少しボケているようだ、これを世間では天然と言っらしい。」

「あ、でも情報はつかめました」

「はあ？」

まさかさっきの幽霊から何か聞いたのか？

そう思いつつ耳を傾ける麗治。

「実はここの神社でキツネ様に会えば幽霊を成仏させる方法を教えてくれるそうです」

「なるほど、キツネ様か・・・」

「なんでもこの神社の裏の林の奥にほこらがあるそうです」

「そうか」

林はだいぶ長い間、誰も手付かずのため荒れ放題で奥まで行くのは大変だった。

「ところで、お名前お聞きしてませんでしたね」

少女が上から聞いてきた。

「沖田麗治、高校生だ」

宙に浮いている少女に答える。

「沖田？・・・もしかして先祖は新撰組に！？」

「いない、ただの商人だった」

真剣にあの沖田総司の家系だと思った少女は落胆した。

「で、君の名前は？」

次は麗治が質問した。

「へ？あ、ああはい、加藤ところです」

「心？」

「ちなみに平仮名で「こころ」ってかきます」

「ああ、こころ、ね」

「年齢は15歳、中学三年生です」

「ふーん」

足場の悪い道無き道を進む麗治。

「死んだ理由は事故です、乗っていたバスが追突事故で横転、そして爆発」

「・・・」

いつの頃の事件かは知っていた、去年、自分が中学三年生の時の出来事だ。

確か小学生の子供の飛び出しでトラックが急停止、小学生にぶつかる寸前に止まれたが運が悪かった。

その後ろにバスがありその後ろでまた乗用車が突っ込んできた。

さらに追い討ちのように後ろから巨大トラックが急停止と運転手のハンドル操作で回転し、

バスと乗用車に激突、乗用車は潰れバスは横転、そのバスがガソリンに引火し爆発、

たまたまトラックはガスなど爆発物ではなくどちらも衣類製品の物資のため、

さらに酷い大惨事にはならなかったが、トラック運転手、バスに乗っていた人、乗用車の家族、

巻き込まれた人もいれて死者21名と、巨大追突事故だったのである。

その当時テレビでその事を知った俺は心底怯えた。

なにせ自分の住む町でこんな大事件が起きたとは・・・。

上に浮かんでいる少女も、不慮の事故で成仏できなくなったのだ。そう思うと・・・悲しみばかりが胸にあふれた。

「そつえば、麗治って私しか見えないんですね」
いきなり呼び捨てされた麗治。

さつきまで悲しみでいっぱいだった胸は怒りへと変わった。

「もう呼び捨て？」

「あ！すみません！つい癖で・・・」

どんな癖だよと思いつつ確かに変だと思った麗治。

「確かにお前しか見えないなんて変だな」

「え、私は「お前」ですか？」

いちいち突っ掛かるころ。

「立場じよう、俺の方が上、だからいいんだよ！」

「うっ」

楽しいトークく？、をしつつやっと目的地、キツネ様のほくらに付いた2人。

「で、どうやって頼むんだ？」

「さあ？」

ここにきてつまずいた2人。

「しかし、変な場所だなあ」

確かに、さつきまで雑草だらけの道だったのにここだけ地面がでて、しかもきれいにほくらが立っていた。

「すみませ〜ん、キツネ様〜」

ほくらに呼びかけるころ。

「そんなんで来るわけ無いだろ」

「なんじゃ、なんかようか？」

「・・・・・・」

あつさり出てきたキツネ様・・・。

「い、いつのまに！」

ほくらの上でたたずむ狐、

「あ？人間とは珍しい」

どうやら、やはりこの狐がキツネ様のようだ。

たしかに普通の狐と違い大きく感じる。

「あのく、私、成仏したいんですけど・・・」

「ん？可愛い子が来たねえ」

そう言つてこちらの目を見据えるキツネ様、

「どうです？成仏の方法なんか？」

どうやらすでに幽霊と会つた為、この化け狐には驚かない麗治。

「・・・わかつた、あんたは縁結びの神を目指しなさい」

「・・・は？」

それって成仏なのか？

ただただ疑問がつる2人だった。

第3話「縁結びの神」

縁結びの神、

赤い糸をつなぐとか、運命の人と出会わせるとか、西洋風に言うとかキューピット。

相手のハートを矢で射抜く……。

「……こいつ神なのか？」

麗治はこころを指差して言う。

「いや、まだ霊魂だ」

「……なぜ神に？」

ここは成仏させるのではと疑問を投げかけるが、

「寿命が短くて「子」として死んだ場合そいつは原則として転生できないのさ」

幸い頭のよかった麗治は素直に理解できた。

「だが、親不孝の「子」としての死と違い、その子は家族全員で死んでいる」

家族全員で死んでいたのか……そう知った麗治は改めてこころの辛さがわかった。

「ま、その場合大体は「子」を「神役」にさせるんだよ」「神役？」

「ポピュラーなのは「死神」、他には「精霊」「背後霊」「座敷わらし」ま、いろいろだよ」

なぜキツネが英語を話すのかは気になったが「神役」についてはよくわかった。

「ま、てなわけであの子は性格上「縁結びの神」が適しているのさ」なるほど、で、本人はどう思っているのか。

「……」

まだ固まってる。

「ま、とりあえずがんばれってことさ」

なんともいい加減だなキツネ様、

「で、こいつはどうすればいいんだ？」

「かんたんさ、カップルをたくさん作ればいいんだよ」

なんとも堪能な英語ではあるが麗治は無視してところに話しかける。

「わかったか？成仏はできないが神になれば良いそうさ、カップルを作る手伝いだぞ、大丈夫お前ならできるって」

早口に喋るがこころは聞いているかわからない。

「心配だねえ、その子一人じゃ無理っぽいね、あんた手伝ってやんな」

ここで呪いの効果が発動されたかと思う麗治。

「まってくれ、いくら俺でもそんなことはできない」

「良いじゃないか、あんた霊力もないのにあの子が見えるんだろ」

あ、霊力無いんだ俺。

「で、それが？」

「運命を感じるねえ、なぜかこの子だけ見えちゃう、これを運命と呼ぶずなんと言つ」

「偶然」

あつさり答える。

「はあ、言いたくないけど、強情な奴にはこれだね」
そう言つて麗治に近づくキツネ様。

体にまとわりつくような体制で麗治の耳元にささやく。

「いいかい、幽霊はデリケートなんだ、心が傷つけば暴れだす、いいかい？霊魂は霊力の源、そして恨みは霊力を強くさせ、復讐する力を与える・・・あの子は可愛い子だねえ、その分見捨てられると、すぐ傷ついてしまいそうだよ、復讐の標的は、間違いなくあんただよ」

見事な脅しを受けた俺は震える体を止めるのに必死だった。
言いたい事は言えたらしく戻るキツネ様、

「なに、何か困ったら会いにこれば良いさ、そついう面倒を見るのも私の仕事だからね」

結局預かる事になった麗治、

「はあ、何で俺が・・・」

「あ、あの」

「ん？」

こころは落ち着いたらしく正常に戻ったようだ。

「私、やっぱりお邪魔でしょうか・・・」

うつむきながら細かい声で喋る、

「い、・・・いや、・・・邪魔じゃあ・・・うんつと」

気まづくなり言葉をにがらす。

「わたし、本当ドジなんです・・・特になにもできないし・・・迷惑・生きている頃も・・・周りにいつぱいかけて・・・あのときの事故も・・・私が・・・映画・・・見に・・・行きたいって・・・わがまましなければ・・・お父さんも・・・お母さんも・・・私、わたしがわる」

「ストップ」

麗治は、涙を流しながら必死に喋るこころの言葉をさえぎった。

「おまえは邪魔じゃない、自分を悪く思っな、大丈夫だから・・・・泣くなよ」

泣かれると辛いからさ、と小さく言った言葉は聞こえなかったが、
こころは、

あの初めて話せる麗治と会ったあの時のように、笑っていた。

「やつぱ、あんたじゃないとその子は守れないのさ」
キツネ様はフツと笑いながら姿を消した。

「とりあえず、家に行くか」
「はい」

林を出て商店街を通る、

「そついえば初めて会った時カップルの側にいたなお前」
「あ、はい、なんだかカップルの近くだと温かいんです」
「へえ」

「明日からたくさんカップル作らないと！」
元気になったこころは燃えていた。

「とりあえず、カップルと言えば学校ですね！」

「・・・まあ・・・」

「?、どうしました？」

変に暗い麗治。

「いや、俺の友達に霊能力のある奴が多くて」

前途多難の波乱万丈な日々が始まる予感のした麗治は憂鬱だった。

第4話「沖田家」

さて、家に着いたご兩人。

「俺の家族は全員靈感ゼロのはずだ、その上鈍感ときている」

一生懸命話している麗治と違いこころは、

「へえ、土地神なんですか」

沖田家の洒落た庭で誰かと話していた。

「って！おい！、うちに幽霊いたのかよ！？」

「幽霊じゃありませんよ、神様ですよ」

恐るべきマイペースぶりをみせるこころ。

「とにかく、家に入るぞ」

「はい！」

「ガチャ」

「ただいま」

「おじゃまします」

早速喋ってしまったこころ。

「あら？お客さん？」

「ち、違うよ、なに言ってるんだよ、俺一人だよ」

母の声にビビりつつこころを睨む麗治。

（お前声他人に聞こえるのかよ！？）

（いえ！？今までそんなこと！）

「おかえり、長い散歩だったな」

4歳年上の兄貴がりビングから出てきた。

「うん、まあ、いろいろ行つて」

「かつこいい」

またもやこころはうつかり喋る。

「かつこいい？」

姿は見えないが声は聞こえる事がわかった。

「あーいや！あ、兄貴今日なんだかつこいいな〜って思ってた
苦し紛れの言い訳。

「れ、麗治！わかるのか！実は髪型変えてみたんだ！どう？かつこ
いい？」

「あ、ごめん、俺の見間違いだった」

いい気になつていた兄貴に冷たい一言を浴びせ階段を上がり2階へ
向かった麗治。

麗治の部屋

「何で声だけ聞こえるんだよ！」

「すみませんすみません！以後気をつけます！」

家でこの様子だと学校ではどうなるか・・・。

「でも・・・かつこいいお兄さんですね」

確かにルックスは申し分ない兄ではあった。

「でも性格ナルシストなんだよ」

あつさり暴露。

「他にご兄弟は？」

「姉貴が一人、父さんも母さんもいる」

「へえ〜、5人家族っていいですね」

「・・・まあな」

家族全員で死んだ、

そんなところの前では、家族の事で胸が苦しくなった。

「お姉さんは美人ですか？」

頬を赤らめきらきらした瞳で真剣に訊いている。

「・・・」

この天然の性格、どうにかならないかな・・・。

「ごはんできたわよ〜」

母の声で階段を下りる2人。

リビングではすでに料理の用意ができていた。

「うーん、いいにおいだな、ママ♪今日はどんなお料理？」

（あの人は？）

（うちの父さん、ああ見えても銀行の代表取締役だ）

メガネをかけ、髪は灰色、スリムな体系だが筋肉はある。

「んもう！パパったら、ビーフシチューだってさっき言ったでしよ」

（お母さん？）

（ああ、一応父さんとは5つ違いだ）

ロングヘアーに長身のスリム体系、ちなみに童顔。

（麗治さんたちの美形の理由はこの人か）

（ん？なんか言った）

（いえ）

「ね、早く食べよう」

（・・・お姉さん？）

（そうだ）

（・・・ポツ）

（赤くなるな）

ショートカットでさらさらヘアー、アイドル顔負けの美人。
麗治とは2つ違いの姉だ。

「では、いっただつきまゝす」

家族全員で食事をとっている家庭はなかなか珍しいだろう。
こころはさすがに幽霊なので食事はできない。

一旦部屋に戻り明日の分の勉強をする麗治。

「・・・うらやましいですね」

「え？」

ところがぼつんとつぶやいた。

「そうか・・・」

やはり家族が寂しいのだろう、見ていると辛いのだろう。

麗治はここに対して優しく接しよう、神になれるよう、手伝おうと決心した。

「あのビーフシチュー・・・おいしそうだったなあ」

そのセリフを聞いて、麗治の決心は崩れたのは言うまでも無い。

「ビーフシチュー?・・・」

「あ、すいません!つい!おなかは減っていませんがなんだか食べたくて」

「なんだそりや・・・」

数分後

こころは勉強している俺を気遣ってか静かにしてくる。

「ジュルリ・・・」

なぜかよだれのすする音が聞こえた。

「おい、どうした?」

こころを呼びかける。

どうやら本を読んでいたようだ。

『世界の美食グルメ』

「なんだかこれを読んでいたら本当に食べる事ができて」

「・・・」

おそらくその理由はお供えのような効果が発揮したと考える。

というかそんなにおなかが減っていたのか!?

「スー・・・スー・・・」

今度は寝ている、可愛い寝顔をして幸せそうだ。

だがそこは俺のベットだと言いたい麗治。

仕方なくその日はずっと起きている事にした。

明日は学校でカップルを作らねば、
と思いつつ、

「あいつらにばれないと良いんだがなあ」

第4話「沖田家」(後書き)

どうでしたか？

次はやつと学校編です。

その次からカップルづくりです・・・。
長くてすいません。

第5話「仲間」

朝、ずっと起きていた俺は今更ながら後悔した。

「ね、眠い・・・」

そういえば昨日も「アインシュタインの自然万物の物理と絶対的法則の罫」を読んでいて寝ていなかったな。

そう思いつつ「人間の窮地の時の心理とその利用法」という謎の本を本棚に置く麗治。

「ふあゝゝ、まだ眠いゝゝ」

たつぷり寝たはずのこころもまだ眠そうだ。

「っておかしいだろ！はよ起きろ！」

西条高等シヨアンナ学校

でっかく校門にはそう書かれていた。

「すごいですね、麗治さんは教会の学校なんですか」

「いや、ここは極普通の私立高校だ」

なぜシヨアンナが入るのはか麗治も知らないようだ。

1 - B

早速教室に入った2人。

「では早速カップルを！」

「まあな、だがこころ、言っておく事がある」

「なんです？」

「この学級には陰陽師の家系だと言い張る奴がいる」

「え！頭大丈夫ですかその人！」

「お前が言っくな！、とにかく、気をつけろよ！」

「何を気をつけるの？」

突然現れた女生徒。

「……………ん？何のようだい？」

慌てずしらばくれる麗治。

彼女の名前は白羽茜^{しろわあかね}、腹黒の悪魔……。

正直「こころが見えるかもリスト」に入れていた危険人物だ。

「あら、麗治ったら天才の癖に誘拐？」

そう言つてその茜はこころを抱きかかえる。

「やつぱ見えんのかよー！」

だが天才麗治は心は動揺していたが表には出さなかった。

「おいおい、冗談はよせよ」

「麗治さん！この人が陰妙師の人ですか！？」

「話し掛けるなばか！！」

「あれ、この子麗治知ってるみたいよ」

「ん？この子ってどの子？」

もうそれは血の付いた凶器を持っているアリバイの無い前科犯の犯人が「俺は殺ってない」と言っているのと同じだった。

「麗治」

茜はそりやもう可愛い笑顔で麗治を呼んだ。

「何でしょう？」

一方天才麗治も負けずイケメンスマイルを返す。

「あなた中学生の頃学校のコンピューターをハッキングしてテストの問題売ってたでしょ」

「やべっ！！つい金に目がくらんでやつちまった事を！ってなぜ知っている！！」

「あと、西条家のセキュリティシステムにウイルス入れたのもあなたでしょ」

「な！それは！西条姉弟が家出してみたいと言って大金を送ってき

「だから仕方なく、って!!」

「何で知ってんだよおお!!」

「で、この子は幽霊なわけで、キューピットにするためあんたが手伝うわけか」

「はい」

何故か屋上で正座させられている俺は仕方なく洗いざらい吐いた。

「わたし、加藤こころです」

「わたしは白羽茜、あかねって呼んでね」

優しい笑顔でお姉さん気取りだが腹の底ではいじってやろうと思っているに違いない。

不孝にも小学校から幼馴染だった麗治は茜の魂胆が見えていた。

「私も手伝ってあげる、そのカップルづくり」

どうせ本当の狙いはカップル全員を把握して脅しのネタを作るんだろ。

「本当ですか！ありがとうございます！」

まあ、こいつなら役に立つ時もあるだろ・・・多分。

「仲間が必要よ、次はトッピーに声をかけるわ」

「ま、まて、そんな広めるような事」

「なに言ってるの、陰陽師なんてかつここのネタ・・・じゃなくて強い味方」

ネタだろ、お前の場合。

「待ってなさい、力になってくれそうな人呼んでくるわ」

余計だよと真剣に思ったが、あいつはそうそう止められない、仕方なく屋上で待つことにした。

「麗治さん、ここの学校大きいですね」

「まあな、こちら辺では一番の生徒数だろ」

「行事とか何があります？」

「さあ、俺はあんまり行事に参加しないから」

「え！不良じゃないですか！」

「いやいや、自由参加なんだよ行事、第一興味が無い」

「・・・・・・」

急に静かになるころ。

「？、なんだ、どうした？」

「ちゃんと出たほうがいいと思いますよ・・・せつかく友達がいるのに」

真剣に泣きそうな顔をしてまで訴えるころ。

「はいはいはい！わかりました！」

「たく、そんなことどうでも・・・」

「さあ！連れてきたわよ！」

茜が意気揚揚に現れた。

「どうした、我を呼び出してまで、幽霊とはいずれに？」

白のカーデガンが規則なのに完全に破って黒の着物を着る変人。

「トッピーよ」

「飛咲一だひさきはな」

怒って一は言い返した。

「で、こっちは西条姉と弟」

金髪で、よく似た姉弟がたっていた。

「あの子が幽霊？」

「へえ、本当にいるんだ」

たいして驚かず興味心身だ。

「キューピットを目指していらっしゃるのね」

「はい、こころって言います」

「よろしくころちゃん」

まあ、常人なのに見えて驚かないのは異常だが、特に問題は無さそ

うだ。

「で、陰陽師トッピーはどう思う？」

「んー？・・・うむ？・・・はっはっはー、麗治、ちょっと来てくれ」

呼ばれる俺、屋上の隅による。

「これ冗談？それとも本当？」

「やっぱお前エセ陰陽師だったのか」

「エセなどではない、俺は人間退治専門なんだ」

「人間退治！？妖怪じゃねえのかよ！？」

その昔、陰陽師には2つの役があり、「妖怪退治」と「人間退治」があった。

「妖怪退治」は悪の妖怪を、「人間退治」は悪人を退治していた

「ってわけで、俺の陰陽術は人間にしか利かん」

「ほお、まあ、それでもいいか、お邪魔虫撃退にもなるし、って

まで、もしかしてお前」

「見えないんだ〜」

ひょっこり茜が首を突っ込む。

「あ、知られたぞはじめ」

「怨陰女通卒環陽幸」

何だ？こいつなに言っているんだ？

「はっ！・・・ねえねえ、何はなしていたか言いなさいよ」

やべええー！記憶消しやがった！！

「なんでもない、そうであろう麗治？」

「・・・お、おう」

「ふん」

こいつマジすごい・・・。

「とりあえず、大体の話はわかってくれた？」
「つまりカップルづくりを手伝ってほしいわけだ」
「いいよ、僕は手伝ってあげるよ！」
「私も！麗治様・・・君とこころちゃんの手伝いをします！」
「よかるう、こころとやら、協力は惜しまん」
「あ、ありがとうございます！」

残念ながらその日はカップルを作れず終わったが、仲間が出来たのは心強い。

「西条さんたちの名前聞きそびれました」

「姉は西条花鈴弟は悠里^{さいしょうかりん ゆつり}」

「へえ、そういえば、西条って・・・なんか聞いたような？」

「西条高等ジョアンナ学校」

「あ、・・・もしかして」

「ああ、あの学校の創立者の家系だよ」

「なんだかすごいですね」

「そりやうちの銀行と提携結んでたり大会社のスポンサーだし」

「・・・大金持ち？」

「億万長者のお嬢様と坊ちやま」

「・・・いいなあ」

「とにかく、仲間がいるんだ、明日からがんばるぞ」

「はい！」

夜

「だから・・・」

麗治はクマのできた目でこころをにらむ。
だがこころは寝ている。

そう、麗治のベットで・・・。

「俺のベットでねるなああああ!!!!」
しぶしぶリビングで寝たそうな・・・。

第6話「熱血野球少年×優等生少女」(前書き)

やっと恋話です。

第6話「熱血野球少年×優等生少女」

「熱血野球少年とおとなしい優等生眼鏡ッ娘」

唐突に茜が不敵な笑みを浮かべて言う。

「どうやら早速カップル作りの仕事のようだ。」

「東堂堺^{とうどうまかい}、野球部2年、期待のエース、4番バッターで強打者、もう一人、藤咲涼子^{ふじさきりょうこ}文学部1年、おとなしい性格で学校2位の学力の持ち主」

俺が2人についての詳細を話す。

「質問は？」

「はいはい！」

「何だところ？」

「学校1位の学力の持ち主は？」

「俺だ」

「え！麗治さんは学年一位じゃあ？」

「うるさい、そんなのどうでも良いだろ！」

屋上で「キューピットクラブ」by茜命名、のメンバーが揃っていた。

「つまり、「野球バカ」と「優等生」をくつつければいいのだな？」

「ちなみに相談者は堺よ」

「難しいな、お姉ちゃん知ってるでしょ堺先輩」

「ええ、スポーツ万能で女子から結構人気よ」

「あれ？花鈴ちゃんは2年だけど茜ちゃんは1年だよね？」

「突然なぐにこころちゃん？」

「なんで堺さん呼び捨てに？怒られちゃうよ」

「あんずるなこころよ、茜はこの学校一の悪代官、先輩方も御ひい

きゲフツ！」

「だゝれが悪代官よこの「陰陽師」だけど不良くん！」
首をしめられたはじめはあわを吐かされるまで苦しめられた。

「で、麗治君、何かいい作戦はないかな？」

茜がすつきりして作戦をきく。

「そうだな、こころ、なにかあるか？」

「そうですねえ、とりあえずシチュエーションが大切なので」

配役

堺 茜 涼子 花鈴 不良 はじめ&悠里 監督 ころこ BGM
麗治

静かな図書室で涼子が本を読んでいる。

そこへ何気なく堺が登場させる。

茜「涼子ちゃん、僕の愛の消える魔球、受け取ってくれ」

BGM「早速おかしいよ、いきなり告白？しかも消える魔球って・・・」

花鈴「うれしいわ！」

そうして2人は結ばれた。

「どう！」

「僕出てない・・・」

「我もだ、せめて斬られ役でもいいから」

「よし、お前らいつぺん頭冷やして来い」

「ふふ、かわいいよ茜」

「あ、茜さん、なに言ってるんですか？」

「そのバカもとまれ、そして頭冷やせ」

「水かぶってきましたよ麗治君」

「まったく、札がぬれる所だった」

「私幽霊だけどなんかかぶれちゃいました」

「氷で冷やしていい？」

ああ、だめだこの人たちは・・・。

「あ、あの、わ、私も？」

「いや、やらないで、お願いしますから」

で、話を戻して。

「俺が思うに、堺のいいところを涼子に見せればいいと思う」

「なるほど、いい戦法だ」

「質問！」

「なんだこころ？」

「なんで麗治さんは2人を呼び捨てに？」

「勉強教えたことがあるから、って変なことではいちいち止めるな！

」！

「ごめんなさい！ごめんなさい！」

「で？堺先輩のいいところって？」

「フッフ、きつと彼の野球の試合を見ればいいわ」

茜が不敵な笑みで言う。

「じゃあ早速！試合を！」

こころは意気込んで野球部の元へ行く。

「残念だけど、野球の試合の予定はまだ無いんだ」

野球部キャプテンがじきじきにお出ましかよ。

「次なる戦いはいつであろうか？」

「さあ、僕らのチーム強すぎて他校が練習試合組んでくれないから、公式までの日数は大分あるし」

「そうですか」

「ん？今の誰の声？」

「こころが思い余って声を出す。」

「ああああああ！??? なななんのことです???」

落ち着け悠里、

「我思うにそなたの耳違いでは？」

耳違い？聞き間違いだろ、というより空耳と言え。

「気にせず試合がんばってください！」

だから試合ないつつってんだろ茜！

グダグダで怪しいまま去る一行。

「作戦を変えよう、堺をまず呼ぼう」

「もう連れてきているよ」

早いなおい。

「堺さんの特技って野球意外にあります？」

「いや、わりい、おれ野球バカだからさ」

「まったく、このバカ」

茜、お前学校最低位の学力だろ。

「やっぱこの場合告白が大事ですよ」

花鈴がまともな事を言ってくれた。

「よし、ならば場所作りね!!」

図書室

「こちら茜、ただいまより図書室の中のターゲット以外の人間を始末します」

「物騒だなおい、あんまり気づかれないようにしろよ」

「イエッサー！」

ターゲット、涼子は一人で読書中、

「まずお喋り女の子3人グループを排除、はじめ！」

「承知、」

はじめが図書室に入る。

「人形操系」

なんかけつたいな技名を唱える。

次の瞬間、女子生徒は固まった。

「出る」

外へ出る。

「よっし！そのままごみ場へ！」

「まてまて！そんなことするな！」

「とにかく家に帰るよう命令した」

「よし」

「つまんない」

「次、読書している5人の生徒、悠里！花鈴！」

「オッケー！」

「がんばります」

まず花鈴が涼子の隣に座る。

「ねえ涼子ちゃん、その本面白そうね」

「あ、どうも、西条さん、そうなんですこの本、本当おもしろくて！」

そして、弟悠里は一人一人に嘘をついて追い出す。

「先生呼んでたよ」

「親が帰ってこいってさ」

「プリン給食室にまだ残ってたよ」

「あ、運動場に宇宙人が」

「実はこの後ここでパーティーするんだ、悪いけど出て」

「ナイス姉弟プレー！これで知らず知らずのうちに涼子一人！」

こっちでは堺先輩が緊張しまくっていた。

「だ、大丈夫かな・・・」

「落ち着いてくださいって」

すでにギクシャクしているようだ。

これじゃあ、話なんてできるか？

「俺・・・自信ねえな」

うじうじしている堺をみてこころはイライラした。

「・・・・・・・・しつかりしてくださいよ!」

げっ!なに喋ってんだよこころ!!

すでにスイッチの入ってしまった様子のこころ。

「そんなにビクビクしてないでドンと言えば良いでしょう!目の前が真っ暗でも!どんなプレッシャーでも!それに勝って!やっと自分らしさがでるんですよ!・・・・好きなら、前に出ちゃいなよ!」

「・・・・・・・・だよな、わりい、勇気付けられたぜ!麗治!」

「あ、・・・・はい、がんばってくださいよ!」

「あなたが・・・好きです!付き合ってください!」

堺は、堂々と自分らしく告白をした。

「え?・・・・その・・・?」

突然の事で真っ赤の涼子。

「わ・・・・私も・・・あなたが好きです・・・」

屋上、

「いやー、うまくいったね」

悠里が寝転んだまま言う。

「みんながんばりましたからねえ」

「見事！恋組成立」

「がんばったわね、特に麗治」

「ん？」

「あなた堺を勇気付けたそうね」

「ああ、それは」

「このキューピットのおかげ」

そう言って、麗治のひざで寝ているところをなでた。

第6話「熱血野球少年×優等生少女」(後書き)

ぜひ感想を！待ってます。

第7話「人気者少女×影薄少年前編」(前書き)

ちよつと長いので前編から。

第7話「人気者少女×影薄少年前編」

「さーで、今日も早速！相談がきているよ♪」

完璧に仕事の呼び込みは茜が仕切る事になった。

相談・・・確か前もそんなことを・・・金取ってるだろうな。

「今日は！影薄幸薄貧弱男と明るい元気ツ娘人気者女だよ！」

うわあ、男の方は酷い言われようだな・・・。

「影雪高志^{かげゆき たかし}、園芸部2年、データー得になし、扇佐奈江バトミント^{おうぎさなえ}部2年、学年でもっとも人気者、ファンクラブ有り」

「ちよつとまってください！高志先輩にデーターなして・・・」

「悠里よ、影薄という言葉聞いたであろう」

「で、でも、そんな、こ、これですと」

「高志っていう人の勝ち目ないですよ、そんな人気者にどうすれば付き合えるの？」

「うん、確かに今回は難しいなあ」

「ちよつとちよつと」

頭を悩ますメンバー達に茜が呼びかける。

「相談者は佐奈江ちゃんのほうよ」

・・・は？

「な、なんと物好きな者である・・・」

「そんな日の光を浴びない者に日が当たりすぎている者が恋をするとは」

「悠里さん、はじめさんと口調がぶってますですよ？」

「と、とにかく、人気者からの告白でしたら、高志君はもちろん・・・」

「いや、相談されてるってことは・・・告白断られたんじゃない？」

「さっすが麗治！ご名答！」

『うつわー、変な者どうしかよ』と突っ込む一同。

とりあえず相談者と対面。

「扇佐奈江です、好きな物はイチゴと高志君で！ってきやー！！
言っちゃったよー！！」

うわあ、うるさいよと心で思う麗治。

「うっさいわよあんた」

堂々と言うな茜！

「と、とりあえずその恋って真剣なんですか？」

悠里が聞いてみる。

「もちろんです！・・・実は私が不良に絡まれている時・・・」

「さなえちゃん、あそぼうぜい」

「い、いやです」

「ええ？いいじゃんかよお」

「やめてください！」

そんな時、高志君が、

「みつともないですよ、大の男が女の子をナンパしていると」

何だかつこよく決めたけど、

あっさり2人にボコボコにされちゃって。

「だ、大丈夫？」

「あ、ええ、慣れてますから・・・」

「私、暴力振る人が大嫌いですから、でも彼は弱いとかじゃなくて、本当に無抵抗で、わたし、彼の優しさに惚れて・・・こんな気持ち、初めてだから」

「・・・そうなんですか」

「よし、では、次は高志に会いに行くぞー！」

「え！？は、早過ぎはしませんか！？」

「そんな事ありませんよー、せつかく彼女の気持ちが真剣なんですから！」

ついノリでしゃべるころ。

「い、今の誰？」

「あーき、気にしないで！」

「そうですそうです！それよりさあ、高志先輩に会いに行きますか！ははは！」

悠里・・・嘘はうまくせに隠すの下手だな・・・。

園芸菜園

「あ、高志君！ちよつといいかな？」

「あ、西条さん、いいですよ」

菜園には高志一人のようだ。

「あのー、扇佐奈江さんのことなんですが・・・」

悠里が話し出す。

「なんだい？君もサナエファンクラブ？だから僕は彼女とは関係無いよ」

「いいえ、私達は「キューピットクラブ」のものです」

茜がかっこつけて言う。

「「キューピットクラブ」？、あの天才沖田が部長で恋の相談をする」

「コラ茜！何で俺が部長なんだ！」

「えへ、だってその方が信頼度高いもん、先生達も認めてて」

「うおおい！せんせー！！！」

心の中で叫ぶ麗治。

「で、まさか佐奈江さん相談したの？」

「はい、相談を受けました。」

肩を落とす麗治と違い明るい茜。

「はあ、どうせ彼女は冗談だろ？面白がつてるけどこっちはファ
ンクラブから因縁つけられて大変なんだよ、大切な植物だって、あ
いつら踏みやがって」

そこには高志が必死に治した花たちの姿があった。

だが、茎は折れてたり、葉がちぎれていたり、見るも無残な状態だ
った。

「そんな、園芸部の皆様のお花が・・・」

「しかも・・・部長に退部命令を言われたよ・・・」

「なに？それはまことか？」

「ああ、ほんとさ、全く、彼女のせいで、花は罪も無いのに踏まれ、
僕は唯一の友達の植物とおさらばしなきゃいけないんだよ、何が好
きですだ、冗談でもやりすぎだろ！」

「うゝむ、見事なまでの幸薄ぶり、不運の星に生まれたしか言いよ
うが無い」

失礼な事を言ったはじめを茜と麗治と悠里が殴り黙らせた。

「だがな高志さん、佐奈江さんは本気なんだよ、これは嘘じゃない」

「・・・そう、でも、僕とだと不釣り合いだし、なにより・・・」

「邪魔なんだよ」

高志の言葉の後、園芸部の菜園の扉が開いた。
そこに立っていたのは、涙を流す佐奈江。

「・・・ごめんなさい・・・」

佐奈江はそう言々と走ってその場から消えた。

「佐奈江さん！まっってください！」

花鈴が追いかける。

「高志先輩！言いすぎでしょ！」

「落ち着け悠里」

麗治が優しくなだめる。

「そつよ！言い過ぎよ！」

「だから落ち着けって」

「落ち着いていられないわよ！悪いのはファンクラブで佐奈江さんは！」

「だからって高志さんは悪くないだろ！」
にらみ合う2人。

「・・・なによ・・・なによ！！麗治のバカ！！」

茜は怒って出て行く。

「あ、茜さん・・・」

「悪い悠里、茜についてやってくれ」

「・・・はい」

悠里は茜を追いかけ出て行った。

「・・・はあ、なんでこうなるんだろ」

唐突に高志は呟いた。

「わるいな・・・俺のせいで」

「高志さんは悪くありませんよ」

「・・・わかってるんだ、佐奈江が本気で惚れていたのも・・・」
薄々感じていた麗治は黙って聞く。

「でもさ、やっぱり不釣り合いなんだよ、人気者で、ファンクラブまである佐奈江と比べ、俺は、陰気な植物だけが友達の暗い存在」

はじめも何時の間にか起きて話を聞いていた。

「・・・佐奈江が惚れた理由の優しいだって、それは誤解で、俺は

単なる臆病なんだよ、暴力をふるわないんじゃない、振っても意味が無いから大人しくしていたんだよ・・・」

「結局、俺みたいな奴と、佐奈江は付き合えないんだよ、不可能なんだよ」

高志は悲しい感じでそう言った。

「なんで不可能なんて決め付けるんですか!!」
「な!?!こころ!?!」

「不釣り合いなんてどうして思うんですか!!彼女は人気者だけど自分は暗い奴だからって!!あなたはそんな理由で!!」

「佐奈江さんの真剣な思いを踏みにじるんですか!!!!」

「・・・だ、だから、俺と付きあったって佐奈江にだって良くないに決まって」

「佐奈江さんは!!あなたが好きなのに!!あなたがその思いを受け取らないから!!今彼女は泣いていたんです!!」

「俺と付き合わないほうがいい　なんて勘違いです!!」
「あなたと一緒にのほうがいい　に決まっているでしょ!!」

こころは全力でそう言った。

「付き合わないほうがいい」ではなく「付き合う」ほうがいい。

「・・・麗治君」
「・・・はい」

こころの声ではあったが、高志は麗治が言っただと思っている。
それがわかっている麗治は優しく返事をした。

「俺間違がってたってことだな、確かに、佐奈江のためなら・・・」

「あいつの真剣な思い・・・受け止めねえとな」

「我もそう思うぞ、高志、思い、届けたほうがよからう」
はじめが高志に佐奈江を追いかけるよう言った時、
扉が急に開いた。

「た、大変です！佐奈江さんが屋上から飛び降りると！！」
「え！！！！？」

続く

第8話「人気者少女×影薄少年後編」

「うゝん．．．結構高いなゝ．．．」

佐奈江は屋上でフェンスを越え出っ張ったコンクリートの上に立っていた。

「でも．．．高志君に嫌われているし．．．迷惑かけちゃったし」まだ涙は止まらなかった。

「高志君の言葉．．．結構．．．痛かった．．．なあ」

真剣に好きだった．．．助けてもらったのもそうだが．．．、

「僕、植物好きでいつも世話しているんだ、おかげで友達はいないけどね」

「そうなんだあゝ、．．．ね、ねえ」

「なんだい？」

「その、えゝ．．．もし、よかつたら．．．友達になっても．．．いい？」

驚きつつ、すぐ、優しい笑顔になった高志。

「ほんと？．．．今すっげえうれしい」

「なんだか調子に乗ってたのかな？わたし」

周りからずっと特別視されて、ファンクラブまでできて、なんだか、普通の友達が減ってて、

その中で．．．一番大切な友達だったのに．．．。

「えゝっと、遺書はちゃんと書いたな、靴の上に置いといてと下を見れば何だか人が集まっていた。」

あれ佐奈江ちゃん？

何やってるの！？まさか飛び降りるの！？

さなえー！ー！ー！やめるんだー！ー！

さなえちゃー！ー！

ファンクラブだの先生方だの騒がしくなり始めた運動場。

「うーん、遺書に「ファンクラブ」のメンバー死刑にして」って
加えようかしら？」

「おいおい、心配してきたのに物騒なこと言うなよ」

佐奈江は体が硬直した、そう、高志の声がしたからだ。

「わ、わたし・・・天国が近いから・・・幻聴が・・・」

「おいおい、落ち着けて」

高志の声がはつきり聞こえる、高志の気配が伝わる。

「ん？遺書？」

「あ！それは！」

「わたし、扇佐奈江は、自殺する事を決意しました。理由は、自分の犯した罪を償うためです。迷惑をかけてしまった、影雪高志様、申し訳ございません。私は命をとってお詫びします」

言い終わった後、高志は吹いて笑い出した。

「ハハハハハ！ー！ー！ー」

「え？なに？なに？私なにかとんでもない間違いを！？」

そう言つてフェンスをくぐり高志の元へ行く。

「な、なにかおかしい点でも？」

「いやさ、この文だと、まるで僕が君に死ねと言つたようなものだろ？それじゃあ君が死んでこの遺書を読んだ人は僕が悪者だと思つちやうよ」

「あ、確かに・・・」

「それに・・・君には死んでほしくないからね」

「・・・え？」

「きつい事言つてごめん、今伝えるよ、僕の本当の気持ち・・・」

『あなたが大好きです』

「これが、僕の気持ち」

「は、ははらひほれ？」

真つ赤になつて湯気を立てる佐奈江。

「え！？ど、どうしたの！？大丈夫か？」

「私も！・・・大大大好きです！！！」

その声は、学校中に響いた・・・。

「これで、一件落着ですわね」

屋上の出入り口から一部始終を見ていた3人。

「そうだな」

麗治も花鈴に相槌を打つ。

「なに言ってるの、麗治さんはまだ問題があるよ」

ところが指摘する。

「ああ、正直、この問題は難問だぜ・・・」

「ははは、茜と喧嘩とは珍しいものだからな、どういたす？」

「・・・とりあえず・・・説教を」

「麗治さん!!」

ふっ、珍しい、俺が怒られるとはな。

図書室

「茜さん、いい加減、麗治さんと仲良く」

「やだ! あんなわからずや! もういいもん!!」

「うわあゝ、すっげえゝ怒ってるよ」

とりあえず図書室へ入る麗治。

「あ、麗治さん」

「ご苦労さん、悠里、あの2人、何とかしたから」

「ええ!! いつの間に・・・」

「とりあえず屋上へ行ってみてくれ」

「はい!」

悠里はさっさと屋上へ行く。

「なあ、茜」

「あああ？何だコラ！！」

「・・・悪かった」

素直に謝る麗治。

「・・・へ？」

「ちよつと言い過ぎたよ、だから悪かった」

「・・・ふん！・・・それでいいのよそれで」

「調子にのるな」

「・・・はああああ？???ぶつ殺す！！」

「わあああ！！！！まで！！冗談だ！！おい！！」

結局茜の投げる本をよける麗治。

茜の顔は・・・なんだか目の下に涙の後があつたが、

どうやら今は笑っているようだ。

「ハハハハハ！！参ったか麗治」

本棚の下でダウンしている麗治。

「はい・・・参りました」

やべえ、医者呼んでくれと思つた麗治。

「ああ、すつきりした」

「そうか・・・ま、だったらここの片づけを」

「あらゝ、大変！今日用事ありましたわ！」

「コラ、嘘ついてんじゃねえよ」

「嘘ではないのですわよ」

「ないないって・・・あ！おい！ほんとに行くな！！」

「べー、乙女を泣かせた代償は大きいんだから！！」

「・・・マジかよ・・・」

その麗治の言葉が、茜の涙のことで言つたのか、はたまたこの荒れ

た本棚を一人で直す事に言ったかは
わからなかった。

「くそ！こころまで先に帰ってたか？」

暗くなつてからやつと帰つてこれた麗治。

部屋

「あははー、麗治さん大変でしたですね」

「そのグルメ本燃やすぞ」

「すみません」

「ま、とりあえず、ご苦労さん」

「はい！」

さて、次はどんなカップルだあ？

第9話「アニメオタク男×体育系熱血女（前書き）」

今回はギャグです。

やっとコメディーらしいのがかけます。

第9話「アニメオタク男×体育系熱血女」

「アニメオタクと熱血体育系少女」

茜が嫌そうな顔をしながら言う。

アニメオタクがそんなにやばかったのか？

「長馬^{ながま}左大^{さだい}アニメ研究会3年、オタク、高見^{たかみ}筑詩^{つくし}陸上部3年、陸上短距離インターハイ準優勝」

「まるでアニメの設定ですね・・・」

悠里が言う。

「まさか前のように女からではあるまい」

「でもそちらの方がやり易いのでは？」

「残念ながらオタクからの相談よ」

「なんだか自信ないです」

のっけからテンションの低いメンバー達。

「まあ、確かにオタクと体育系少女なんかどうがんばってもなあ」

アニメ研究会

「相談者の長馬です」

想像と違いがっちりとした体系で長身の眼鏡をかけた男。

「早速ですがオタクやめてもらえませんか？」

「そんなんでやめるか茜」

「やめろって・・・リリタンを諦めろって言うのか!！」

「うわあ〜うぜえ」

「悠里!可愛い顔でそんな事言うな!こわい!」

「僕はリリタン命なんだ!！」

「ならばいつそのこと死に絶えよ」

「やばい!はじめも機嫌が悪い!変な呪いをかけられる!！」

「第一リリタン命の癖になんで筑詩に恋してんのよ」

「だってリリタンとツクシタン似てるもん」

「貴様のようなゴミを応援する気は全くございませんわ」

「えええ！？花鈴さん！？ちょ！怖い！怖いよー！！」

「というわけで今回の相談は無効とします」

茜がそうそうと言つてのける。

（うん、まあ、そうなっちゃうか）

（れ、麗治さんまで！ひどいですよぉ）

（そんな事言われてもなあ）

（うゝゝゝ、いいです！！だったら私一人ででも！！）

（なー！！・・・わかった、わかった、俺も手伝うよ）

「さ、麗治もいこー！」

茜が出て行こうと呼びかける。

「悪いがこいつが手伝うつて聞かないんだ、今回は俺達だけでいいよ」

「む、こころは変わり者だな」

「でもなあ、やっぱ手伝いましょうか？」

「いや、逆に今回は少人数のほうがいい」

「いや！わたくしは是非ともお手伝いを！」

「わかった、麗治がんばってね」

「え！お待ちください！わたしは！」

「さぁー行きましよ花鈴ちゃん」

残ろうとする花鈴を引きずって出て行く茜達。

「さて、とりあえず」

麗治が話し出す。

「あなたは筑詩さんと二次元の世界の存在しないもの、どっちが好きなんですか？」

「リリタンだよ」

左大が堂々と言う、だがもちろん麗治はキレる。

「だからなあ、おいテメエなめんなよ、ああ？いい加減現実逃避す

んなよ」

「まあまあ、落ち着いて」

首の襟を捕まれ鬼の形相で睨まれても平気な左大、

「実は僕がアニメオタクになったのも理由があつて・・・」

中学生の頃、陸上部砲丸投げ選手として一目置かれていた僕はそりやモテた。

今じゃあオタクでキモがられているけど、

ある時真剣に好きだった子がいたんだ。

でも付き合ったけど、他にも付き合っている人がいて、二股の事を責めたら、「もうあなたはいいから別れて」って言われて別れたんだ。

それ以来、人より僕はアニメの世界の女の子が好きになったんだ。いわゆる「人間不信」みたいなものさ。

「で、この前ツクシタンに勝負しろって言われて」

「？」

「なんか中学生の時の僕知っているみたいで、砲丸投げで勝負らしいけど」

「お、おい」

「正直ここ数年運動と言えば日々の筋トレだけだから自信なくて」

「まて」

「まあ、本当の事を言つとめんどくさいからやりたくなくて」

「は？」

「君達に恋だと嘘でもつけばツクシタンも嫌がつて勝負しないと思
い相談を」

「貴様死にたいのか？」

麗治が耐え切れず首をしめる。

「アガガガガ！！！まって！！ギブギブ！！」

「つまり貴様は勝負をすっぱかしたいが為に俺らに頼んだのか」

「ははは、だって僕女の子に対してトラウマがあるから」

「だったら、俺らが筑詩にお前が好きだと伝えればそれでいいんだな」

「そうそう、ごめんね変な事頼んで、ちゃんと料金払うから」

「・・・それって茜にか？」

「そう言われたよ？5万ぐらいって」

ぼったくりだなオイ。

「麗治さ〜ん」

「なんだ？」

「・・・これってキューピットの仕事ですか？」

「いや、不幸の神の仕事だ」

「・・・そんなぁ」

「ま、お前がやりたいといったんだろ」

「・・・おかしいなぁ？」

「なにが？」

「私のカンが恋を呼んでいるんですよ」

「・・・さっぱり意味がわからん」

「つまり、私の持つている特別能力が誰かの恋心をキャッチするんですよ」

「・・・その能力もともとあったのか？」

「はい、キツネ様が教えてくれました」

「ほう、ってことは、お前が言いたいのは・・・」

「あの2人のどちらかが恋心を抱いてるはずなんです」

「・・・となると・・・この場合・・・」

運動場で体操服で走っている筑詩を呼ぶ麗治。

「あ、左さんを知ってますか？」

「!!!!」

(・・・恋心が感じます)

(
・
・
・
や
っ
ぱ
り
)

「さささ左大のやろ！ ややややつつつとしよしよ勝負を！？」

「うん、どうしようか？……まてよ……よし！」

「筑詩さん、左大さんからの伝言です」

「お、お、おう！なんだ！！」

「あなたが好きだそうです」

「!!!!!!!!!!!!」

「ばばばばー!!ばっきゃろー!!ウ、ウ、嘘ついてんじゃ!!」

「嘘じゃありませんよ、僕は沖田ですよ？」

「お、沖田？あのキューピットクラブ部長の？なるほど……」

どちらかと言うと「天才の沖田」と言ってほしかったがこの際どちらでもいい。

「で、で、でも、オレはあのままの左大は嫌いだ！」

「好意を認めおつたわ」

ぶん殴られるはじめ。

「何ではじめがここにいるんだよ？」

「グ……いや、陰陽センサーに引っかかり気になってな」

何だそれと思いつつ無視して麗治は話を戻す。

「もちろん左さんは中学校の頃の自分になって戻ると言ってます」

「そ、そそれって、ほほんとうなんだろうな!!」

「ええ、しかも勝負に勝って君を僕のものにすると」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

今までに無い動揺を見せフラフラの筑詩、

「では、一週間後に」

「……事になりました」

「なんだそりゃああああ!!!!!!!!!!」

案の定叫ぶ左大。

「筑詩のバカ! 昔の俺はもういねえつつてんのに!! まだ好きだったのかよ!!」

「ほほう、若き日の傷の為、嘘の自分を演じていたとはな」

「まあなんとなく気づいてたがな、毎日筋トレしてるって言っし、他のオタクに訊いたら」

『え? 左大? あいつ部員だけど完全なオタクじゃねえよ』

「って言ってたし」

「はははははは、これで陸上部へ転向であろう、愉快愉快♪」

「ゴキッ!」

はじめの言葉にキレた左大は、はじめの首をへし折った。

「うおおお!!!!!! はじめ!!!!!! しっかりしろ!!!!!!」

「あれえ、こころが見えるぞ? 我もやつと・み・み・み・え・た?」

「やばいです!! 幽霊になりかけてますよ!!!!!!」

「おい、俺は今から筑詩に好きじゃないって伝えに行くからな!!!!!!」
「ばかやろ!!!!!!」

麗治は左大を殴った。

「な！なにすんだよ！！」

「中学校の頃から、筑詩さんはあなたの事を思っていたんでしょ、あなたが傷ついた事もわかってるはずです・・・それでも筑詩さんはあなたの事を思っているんです！！信じてあげてください！！
！あの筑詩さんの思いは本当なんですから！！」

こころが言う。

その言葉は、きっと、左大の心に伝わったはずだ。

「・・・・・・・・わかった、信じてみよう」

勝負当日

「さああ！！見ものだよ！！陸上部女子キャプテン高見筑詩と！！
あのアニメオタク長馬左大が砲丸投げで勝負だ！！さあ！どっちが勝つか賭けてみないかい！！」

茜が協力の為か金の為かわからないが観客を呼ぶ。

「えゝ、でも筑詩先輩砲丸は専門外でしょ？」

「なに言ってるの！運動全般得意なのよ高見先輩は！！アニメオタクなんかに負けないわよ！！」

「でも長馬って体は大きいし筋肉あるもんな」

「もしかすると勝てるかもしれんぞ！！」

「ではまず一球！高見先輩が投げます！」

のりのりの実況悠里が喋る。

筑詩は観客に手を振りピースをする。

「きゃーー！！筑詩様！！！！」

「高見ってかわいいなあ」

「ああ、結構人気あるもんな」

筑詩は力をこめて投げる。

短めのポニーテールがなびく。

「結果！・・・１８メートル！」

「わあああああああああああああ！！！！！」

「女子で１８は行き過ぎだろ！！」

麗治は心配になった。

「か、勝てますか？」

「フツ、大丈夫だ、これでも砲丸投げ中学生ギネス記録保持者だから」

そうだったのかと驚愕する麗治。

「続きまして！長馬先輩です！！」

「オタクが勝てるわけ無いでしょ」

「全く、筑詩様にはむかうなんてバカね・・・あれ？」

運動場で眼鏡を外す左大、

「それって・・・ダメガネ？」

麗治が先ほどより更に驚いて訊く。

「ああ、オレはもう昔の左大だ」

「うそっ！！なにあれ！！？？誰？？？」

「な・・・長馬？・・・はあああ！！！！」

「ま、ま、まままさか！？」

「なにあれ！！超美形じゃん！？誰だよ！？？」

「あ！悠里！マイクに向かって喋るな！！放送されているのよ！！！」
茜と悠里が慌てる・・・。

「左大・・・オレに勝てると思っっているのか？」

筑詩が顔を隠して訊いている。

「おいおい、一度も勝った事無いくせに自信満々だな」
筑詩が顔をしかめる。

「お前！いい気に」

「安心しな、勝ってお前をオレのものに」

「ガッツ！！」

顔面に筑詩の拳が入る。

「そのセリフは・・・オレだけのところで言え！」

「・・・肉体派カップルだな・・・」

「では！とにかく投げてもらいましょう！どうぞ！」
左大が構える、

「うおおおおお！！！！！」

ブン投げる・・・。

「・・・記録！！23メートル！！！！」

「まで！！！！日本記録超えた！？」

「ま、一件落着ね」

茜が稼いだ金を数えながら言う。

「まさか長馬さんを改心させるとは・・・素晴らしいですわ」

「おお、30万、結構たまったなあ」

「おい茜、俺の報酬は？」

「は？無いよ」

「・・・・・・・・」

「このやる！！少しは分ける！！」

「やーだよ！！欲しいなら来てみなさい！」

運動場で走る茜を必死に追いかける麗治。

「今回長かったね」

「そうだねこころちゃん」

「作者いわく文字数は過去最高だと」

「・・・さて、次の相談者は誰でしょうか？」

第9話「アニメオタク男×体育系熱血女（後書き）」

どうでしたか？

ここでお知らせです。

カップリング募集をします！

どんな奇想天外なものでもいいです！

こんな♂と♀の恋はどう？って感じで募集です！

後はA T U R A が編集します！

もちろん感想・評価も待ってます！

第10話「虐めに対する防衛前編」

屋上

「いよいよ九月か・・・」

麗治が唐突に言った。

「9月だと何があるんですか？」

「こころがのんきに聞く。」

「確か体育祭があつたな」

「運動会って事ですか？」

「ま、そんなところだ」

「フッフ、気が上々だな」

はじめがへわくわくするなあ！」と言った。

「にしてもそろそろ」

「依頼が来るころですわねえ」

悠里と花鈴が紅茶を飲みつつ言う。

「バンツ！」

屋上の扉が開く。

「今回は変わった依頼よ！学園アイドル少年と内気少女で内気少女へのいじめを止めて欲しいそうよ」

「・・・は？」

変わった依頼だなホント。

「森山将俊もりやま まさゆし、サッカー部2年、その美形と優しい性格が女子から絶大な人気を得て学園のアイドルと言われている。井藤都葉沙いとう つはさ、芸術部2年、以上」

「なんだか高志先輩と佐奈江先輩の時と似てますね」

「ところが今回は、2人はもう付き合っているの」

「と言う事は、都葉沙さんいじめに!？」

「なるほど、その苦境から救えと」

「そうならば急ぎましょう!!困った人は助けなきゃ!」

こころがいざ出陣と言わんばかりに立ち上がる。

「ちよつとまで」

麗治が止める。

「なんです?麗治さん」

「いじめにあっている人を助けるのは簡単だ、いじめている人をやつつけばいい、だがいじめを止めさせるとなると一筋縄では行かない、前回の高志と佐奈江のように全校生徒の前で告白していれば学校公認のカップルで嫌がらせも終わるかもしれないが……今回いじめているのは女だよな?」

「ええ、いじているグループは女子よ」

「男なら諦めがつくでいいかもしれないが女はしつこい、本当に好きなら何でもやるっていうぐらいだいいじめを止めさせる方法は暴力や説教ではどうにもならない、それに、2人も公認のカップルになりたいだろうし」

「ほう、ではどういたす?よき良薬はあるのか?」

「そうだな……とりあえず2人に会いに行こう、いじめもどうなのか知りたいしな」

「2・B、ここですわ」

都葉沙の教室に来た一行。

「で、本人はいるのか?」

教室をのぞくと、驚きの光景があつた。

女子の10人ぐらいの塊の中に誰かがいる。

「あんたさー、そろそろ諦めてマサの彼女やめてよね」

「い、いやです」

「はあ？なに？反抗？マジうざー」

「あんたさ、いい気になってんじゃないわよ！！」

「マサ君はみんなの者なんだから独り占めは最低よ！」

「まだ懲りてないようね、誰か水持ってきて」

中で座らされているのは都葉沙のようだ。

ゴミをかけられたのかホコリや紙屑が付いている。

「ひどいわね」

「あんまりですわ！！先生方は！？」

「きつと脅されて先生には助けを言っていないんだろ、くそ、ここまで酷いか」

「かわいそうですよ！早く助けなきゃ！」

「こころちゃん落ち着いて・・・あれ？はじめ君は？」

悠里がはじめの存在が無い事に気づく。

「な！？あいつどこにいるんだ？」

「ちよつといいの！？都葉沙に水かけようとしてるよ！？」

「な！？やばい！それだけは止めねえと！」

バケツを持っている女子生徒は都葉沙の前にいる。

「わかってるよね？センコーに言ったらあんたの友達もいじめの対象だから」

薄笑いを浮かべながらバケツを抱える。

「そうねえ、言い訳は・・・「プールで泳いじやいました」にしたら？」

「キャハハ！それチョー受ける！」

「じゃあ、いつせーのー」

「待てコラ」

はじめが怖い形相で睨む。

麗治はその後ろで固まっている。

麗治は知っている、はじめの裏を・・・。

「な、なによあんた？」

「貴様らこそなにしてんだよ？」

「別に？お前は関係ないだろ」

「・・・いい気になんなよアマ」

「なにさまよあんた？」

「貴様らには教える事すら惜しい」

「なにこいつ？おかしくない？」

やばい、元喧嘩師の性格が現れている。

麗治は中学生のころ聞いた噂を思い出した。

喧嘩上等、反対する奴はぶちのめす、オレ様主義。

喧嘩を売った奴は病院行きで警察すら恐れていた少年。

通称「喧嘩師」一匹狼でありながら傘下には東日本を制圧していた

もんすたあ

暴走族「門棲蛇阿」や関東の「関東スケバン連合」また「南湘吉良

なんしゅうき

利」など超巨大暴走族軍団の総長とまで言われたはじめだったが内

部分裂が問題で軍団が消滅、だがあいつは事実上「日本制圧」を成

し遂げていた・・・。

以後、あいつは自ら喧嘩師という名を捨て常人になった。

つて、なに？はじめそんなにすごいの？

変な言葉使ってるのに？あれ？

混乱により動いていない麗治をよそにはじめと女子生徒の言い争いは激しくなった。

「お前関係ないからあっち行けよ！」

「オレはなあ、弱い奴をたかって虐めるような奴は嫌いだよ」

「ねえ、もしかしてこいつ、あの喧嘩師？」
「え！？喧嘩師って、日本制圧したあいつ？」
「えええ？そいつ逮捕されて死刑になったんじゃ？」
「何言ってるの！写真見たでしょ？だいぶ前だけど100人病院行きにさせたって」

「おい」

女子生徒がはじめの正体を知りあわてる。

「うせろ」

「た、助かりました、ありがとうございます」
「いや、礼には及ばん、人助けは当然行だ」
ニコニコして言うはじめ。

「とりあえず、いじめを防いだが・・・はじめ、お前」
「なんであろう？」

「・・・どうする？お前が喧嘩師だとばれて」
「何を言うか、我は陰陽師、記憶などあっさり消せるわ」
「・・・うん、そうだったな」

体育館裏

「ここなら誰にもみつからないわね」
「でもはじめさんかっこよかったですよ！」「やめないか」っていじめを止めて」

（とうとう嘘記憶まで使ったか）
「今将俊君を呼んできましたわ」
「都葉沙！」
「マサ！」

「ひどいな、あの虐めようは」

「・・・やはりそうですか」

「つねに御守り通すことは出来なからうか？」

「無理だ、将俊さんは他の女子生徒に捕まって動けない、そこを上手く利用され虐められる」

「そんな、なんて悪い奴ら、付き合っているのが分かっているくせに」

「茜さん・・・」

「・・・考えられる対処法は・・・2人はこの学校を出て行き転校することだ」

「無理ですわ、そんな事すぐには出来ませんわよ」

「それが無理なら・・・この作戦だ」

第10話「虐めに対する防衛前編」（後書き）

非常に遅い更新申し訳ございませんでした。
何とか週一更新でがんばっていきたいです。

第11話「虐めに対する防衛中篇」(前書き)

さて？麗治の作戦とは？

第11話「虐めに対する防衛中篇」

『・・・という作戦だ』

昨日麗治は全員に作戦を伝え決行は明日と言った。

そして、その日が来た・・・。

都葉沙の教室。

そこでは都葉沙とはじめがいる。

どうやらはじめが恐ろしくて周りの女子は手を出せないようだ。

「ごめんなさい、ちょっとトイレに・・・」

「御意、ここで待とう」

すぐに女子の目が光る。

女子トイレ。

「ガチャッ」

トイレのドアが閉まる音を確認め女子たちがバケツに水をいれる。

閉まっているドアは1つ、

つまり都葉沙一人。

「バツシャアーン!!」

案の定水を上からかける。

「クスクスクス」

「どう？頭冷えた？」

いじめ成功とたかをくくっている女子は次の衝撃な場面にあいた口が塞がらなかった。

「ガチャッ」

「何のつもりですか？私に何かうらみでも？」

出てきたのは、西条花鈴、びしょ濡れで怒った顔をしている。

無論、学園の長の娘であり、財力、地位のあるお嬢様をこんなにさせたのでは、

「ち！ちがうんです！！私たちは！！」

言い訳も効く筈がない。

「あら？何か理由でも？もつとも、お父様にこの事を言えばあなた方は即退学ですわ」

「い、いえ、その・・・」

まさかここでいじめていたと言えば更にまずい事になる。

都葉沙のせいだと濡れ衣を着せるにも本人がいない。

「その・・・これは」

「もういいですわ、こんなにお人がいるのに誰一人として答えられないなんて、でも、わたしも鬼ではありませんわ、一応、この事を黙ってあげますわ」

「あ、ありがとうございます！」

《第一作戦！クリアですわ！》

《そうですね！ご苦労様です姉さん！》

女子たちが外へ出たのを見計らい超小型のピラス型無線機で悠里と連絡をとる花鈴。

「もう大丈夫ですわ都葉沙さん」

そう呼びかけると、

掃除道具入れのドアが開く。

そう、もともとダミーの花鈴をわざと狙わせ、盲点である掃除道具入れに都葉沙を隠す作戦。

はじめはあくまでも教室での見張り、

わざと相手をこう仕向けるようにしたのだ。

これであいての弱みを握った。

《第二作戦！茜さん！》

《あら？やつと出番のようね》

体育の時間前。

都葉沙は女子更衣室で着替えグランドへ向かう。

案の定、またいじめ集団が動き出す。

一人が更衣室へ、都葉沙のロッカーの前に行く。

カギなどは設置されていない、簡単に開いた扉の中の制服を取り出す。

そのまま持ち去ろうとした時。

「見ちゃった」

更衣室のドアがいつの間にか開いており、茜がカメラを持って立っている。

「カシャッ！」

「あ！」

シャツターを押し、決定的瞬間を撮る。

「レズ疑惑！？女子生徒の制服持ち出す！！、うんいい題名！」
情報屋茜、悪魔、悪代官、茜の通称はいくらでもある。

そして、ネタをすぐバラす。弱みを握る、

相手をゆするのは当たり前と来た危険人物。

「ち！違っわよ！！レズなんかじゃ！！」

「え？？じゃあなんでえ？？ハッ！まさかいじめ？これもネタね、先生に売れるわ」

売るって何だよと訊きたいところだがそれどころではない。

「い、いじめてるの私一人じゃないもん！！」

「へ？？じゃあ他に誰が？」

「○○ちゃんも○○さんも・・・」

「ふんふん、合計35名、よし、情報ゲット」

その言葉で我に返った女子【一名】は、
また弱みを握られた事になる。

「あと、花鈴が怒っていた水かけの件についても詳しく」

「いやぁー……!!」

全てを知っているという恐怖を突きつけた茜、
精神崩壊一步手前の女子は泣きながら制服を投げ捨て走って出て行
った。

《うまくいったよん》

《……すごいですね、経験あるんでしょう？》

《え、訊いちやう？悠里くん聞きたい？》

《いいです……》

屋上

「今第二作戦完了しました」

悠里が麗治とところに伝える。

「うん……その……よくやった」

「逆にすごすぎませんか？」

「まあ……そういう奴らだ、あとは俺達だな」

いじめ集団の女子達はだいぶ気が立っていた。

いじめがことごとく失敗し、今も都葉沙にははじめがいる。
だが、ここではじめが動いた。

「では、我は時が来たので、おいとましよう」

「はい、わかりました」

もちろん女子達がこの機を逃すわけがなかった。

「ちょっと」

「体育館裏に来なさいよ」

第11話「虐めに対する防衛中篇」(後書き)

いよいよ防衛編最終章。

第12話「虐めに対する防衛後編」(前書き)

いじめはどんな理由があろうと許されない。
こころ語録炸裂！

第12話「虐めに対する防衛後編」

誰もいない体育館裏、

呼び出された都葉沙は女子達に囲まれていた。

「あの変な男つけたからっていい気にならないでよ」

「いい加減マサから離れなさいよ！」

「はつきり言ってお似合いじゃないのよ！」

罵声を浴びる都葉沙、

言いたい放題の女子達は手を出してきた。

「バシッ!!」

平手でたたく。

「痛いゝ？痛いよね？マサ君諦めたら許すよ？」

「どうすんのよ？」

「私は・・・」

拳を握り力を込めて、都葉沙は自分の思いを言った。

「私は！なんと言われ様と！マサが好き！殴られても！蹴られても！好きな気持ちは消えないあなた達に負けるような！そんな軽い思いじゃないのよ!!」

常に黙って、何も言い返さず、泣いていただけの都葉沙が、力強く思いを述べた、真剣な思いで、女子達はあっけに取られつつ、心に中に突っかかる何かを感じた。

「なによ、うつさいわよ!!」

一人の女生徒が拳で殴りかかる。

「よせ」

麗治が止めに入る。

「あ、あいつって」

「天才の沖田・・・」

その後ろから将俊がやってきた。

「マサ！」

女子達が慌て始める。

「みんな、僕は、都葉沙が好きなんだ。悪いけど、全員を好きになる事はできない。だから、怒りたくなるのもわかるけど、都葉沙をもうこれ以上いじめないでくれ、お願いだ、僕ならいくら悪く言われてもいい、だから、もう、いじめないでくれ」

将俊は優しく言った。

女子達も顔をうつむき悩んでいる。

「でも、やっぱり辛いよ・・・」

誰か一人が言った。

「そうよ！一人だけなのは分かるけど・・・でも」

「私たちだって好きなのよ！！負けなくらい大好きなのよ！！」

「私たちの思いはどうなるの！これでお終いつて言うの？」

将俊は困った顔をして、こんな自分を悔やんだ。

「ごめん・・・」

そうとしか言わなかった。

「別れてよ！」

「一人だけって言わずみんなを好きになってよ！」

「そんなの本当の愛じゃない!!」
この修羅場で、こころは耐え切れず叫んだ。

「全員を好きになればいいなんて! そんな訳ないよ!!... 確かに、確かに!! 好きという思いがあつて! でも! その恋が叶わないのは... 苦しいよ... 分かるよ... 将俊先輩は、よく分かっているよ、でも! だからって!! 将俊先輩と都葉沙先輩が別れて一人ではなくみんなを好きになるのは! 間違っている!!... 思いは伝わっているんだよ、でも、どうする事も出来ないのは、わかっている筈だよ、第一!」

「他の幸せを壊して手に入れた幸せより、自分の力で手に入れた幸せのほうが、いいに決まってるじゃん、そうでしょ」

こころの言葉の後、女子達は泣いた。
そして都葉沙に泣きながら謝った。
もちろん都葉沙は許した。

屋上

「今回の依頼はキューピットの仕事だったんでしょうか?」
悠里は考えながら全員に訊いた。

「そ、それは... どうでしょう?」

花鈴はあいまいに答える。

「まあ、いいじゃないそこは」

茜がぶっきらぼうに言う。

「同意、大切なのはそこではなかつた
はじめも頷いて言う。」

「ま、お前は満足だろ? こころ」
麗治がこころに訊く。

「はい！」

こころは元気に答えた。

さて、次の依頼もがんばるか。

第12話「虐めに対する防衛後編」(後書き)

読者数500人突破。

この場を借りて礼を申そう。byはじめ

第13話「ピアニスト少年×ヴァイオリニスト少女」

「ピアニスト少年とヴァイオリニスト少女！」

茜がキラキラとした目で言う。

そういえばこいつ唯一できる教科音楽だったな・・・。

「五十嵐園吹奏楽2年、ピアニストとして将来有望、全国ピアニスト演奏会で審査員特別賞、優秀賞受賞。琴芽蒼衣吹奏楽1年、ヴァイオリン担当、しかし今だ弾けない初心者」

「なるほど、でも今回は難しくありませんね」

悠里が喜んで答える。

「そうですね、同じ部活動ならばチャンスは大いにありますわ！」

「ふつ、して、相談者はどちらであろう？」

「蒼衣のほうよ、よし！ちゃっちゃとしちゃいましょう！」

「そうですね！ー！」

吹奏楽部

「ん？蒼衣ちゃん？確か今なら第3音楽室で練習中よ」

吹奏楽部女子部長に相談者の居所を聞く。

「ちなみに園さんは？」

麗治がそれとなく訊く。

「園君も第3音楽室よ」

「ラッキーですね！これならすぐ恋も上手くいきますよ！」

「であるうな、しかし悠里、まだわからぬぞ？恋敵がおるやも知れぬ」

「フッフッフ、茜ちゃん情報！園を好きなのは今のところ蒼衣ぐらいよ」

「素晴らしいですわ！これで円満に幸せになれますわね！」

「そうですね！麗治さんもそう思うでしょ？」

「おいおい・・・こころ、恋つてのはチャンスが多いとか敵がいなかったっていいわけじゃねえだろ」

「え！！なんで？そんなわけ！」

「だからお互い好きじゃなきゃ無理だろ」

「……あ……」

見事5人がハモツた。

第3音楽室

行き成り入るのも失礼なのでドアに耳を付ける。

中からはピアノとヴァイオリンの音色が聞こえてきた。

ピアノの音はしっかりとしていて美しい。

だが対照的にヴァイオリンの音は弱々しくお世辞にもうまいとはいえない。

「そんなんじゃダメだ、もう一度最初から」
園の声が聞こえる。

もう一度やるがなかなかヴァイオリンの音はよくならない。

「今のところはフレットで次は休符、あとリズムが崩れている、もう一度」

スパルタで指導をする園。

「す、すみません、手が痛くて動けないんです、少し休憩を」
「……ハア、1分だけな」

「……うわ」

麗治がなんとも言えない声を出す。

「仲がいいって・・わけでもないようね」

「ちよつと厳しいですわ園君」

「どうします？中へ入ります？」

「いや、ここは退散すべきであろう」

「ええ？ちよつ！はじめさんここまで来て」

「いや、こころ、はじめの言う通りだ、ここは戻ったほうがいい」
そういつて屋上へ向かった一行。

屋上

「どうする？」

茜がやりきれない声で言う。

「そっだな、あの様子だと、どうも園は蒼衣を一部員としか見ていない。蒼衣の気持ちを伝えたところで、相手がいいと言うかどうか・
・」

「そうですね、ただ思いを伝えるのはダメでしょうから・」

「うーん、自分の真剣な思いを形として届けられそうですか？」

悠里のなんとなく言った言葉が麗治の頭に止まった。

「そうか！悠里、いい事言うな！それでいこう！」

「え！？な、何ですか？」

「真剣な思いを形にして伝えるんだよ、つまり、ヴァイオリンの特訓をすればいい」

そう言つて麗治は作戦を話す。

第4音楽室

「つ、つまり、思いを伝えるためにヴァイオリンを特訓して思いを形にする・・・ですか」

蒼衣がヴァイオリンを持って答える。

「そっだ、真剣な思いを伝えるにはいい方法だろ」

「ちなみにコーチは私ね！」

茜が笑顔で言う、よほど音楽がすきなのか？

「違っわ、そこはシャープ、もっと弦をよく見て」
「はい！」

毎日放課の時間に音楽室に来ては特訓を続けた蒼衣。

麗治やはじめや悠里は来れない時があったが、
茜とこころと花鈴は常に練習に付き合った。

三週間後、

蒼衣の成長振りは驚くものだった。

あの初めて聞いた時の音とは違い、力がある。

「これなら大丈夫よ！うまくなったわ」

「あ、ありがとうございます！茜さんに皆さんのお陰です！」
蒼衣は頭を下げてお礼を言った。

「そんな事はない、そなたのがんばりが良かったのだ」

「そうですよ！いつもいつも特訓していたんですから」

「自信をお持ちください、きつと園くんも褒めてくれますわ」

「ああ、これで思いもしっかり届くだろう」

「よくがんばりました！すごいです！」

「ありがとうございます！・・・？、あれ？」

ついこころが喋る。

「さ、さあ！早速園のところへ行くか！」

麗治が慌ててごまかす。

「・・・フフ」

「？、何笑ってるの蒼衣？」

「いや、茜ちゃんに教えてもらっている時、何だか花鈴さんの他にも、応援してくれている人がいるような気がして、へ、変ですよね？でも・・・ありがとうございます」

蒼衣はこころの存在が薄っすら伝わっていたようだ。

「・・・どういたしました」

そっと、こころはそう言った。

「園先輩、少しいいですか？」

「ん？ああ、西条君か、何のようだい？」

「ま、気にせず来て頂こう」

はじめが園の腕を掴んで強引に連れて行く。

「ま、待ってくれ！僕はお金はないぞ！」

「我をゴロツキと思うな！悪い事はせぬ、案ずるな」

「あゝ、とにかく来ていただければいいんです」

「・・・時に、そなたは、蒼衣なるものをどう思う？」

「は？琴芽のことかい？・・・どう思うって、大事な後輩だよ？」

「・・・好きではないのか？」

「・・・え？」

園の表情が困惑する。

「ちよっ！はじめくんそんな事今聞いちゃ！」

「いや、聞かねばならぬ、返答はいかに？」

「・・・そうだね、琴芽の、思いの大きさによるな」

「・・・よかろう、それが返答だな？」

第3音楽室

「連れて来ました」

悠里が先に入る。

「せ、先輩・・・」

蒼衣が赤くなる。

「さあ、蒼衣、ちゃんとやりなさいよ」

茜が背中を押す。

「せ、先輩、私のヴァイオリン、聞いてください」
無言で頷く園。

蒼衣は弾き始めた。

その曲は苦手なものだった、
だが園が好きだという事で蒼衣はその曲を練習した。

特に音楽に興味はなかった。

ヴァイオリンなんて触った事もなかった。

ただ、

園の弾くピアノの音に惹かれ、

園に惹かれ……。

ヴァイオリンを選んだ理由は、

ピアノと練習するから。

ただ、それだけだった。

だが、その思いは変わった。

好きという思いをヴァイオリンで伝える。

ヴァイオリンを選んだ理由が小さかったのに、

ヴァイオリンをやる意味が大きなことになった。

蒼衣が弾き終わる。

麗治達は今までのと比べ物にならない上手さを感じて驚いていた。

「先輩・・・好きです!」

固まっている園。

だが、きつと伝わっているだろう。

そつと音楽室を出た6人だった。

「今回も無事に解決できましたね!」

「うむ、感無量だ」

「そうですわね」

「麗治く、知ってる?」

茜がニコニコした顔で言う。

「こころちゃんずつと蒼衣ちゃんを応援してたんだよ、その気持ち、

伝わったみたいよ」

「そうか、それはよかったな」

「はい！」

ところが元気に返事をする。

「ちなみにコーチ料2万」

茜が麗治に催促した。

「・・・は？なぜオレ？」

「だって頼んだの麗治じゃん」

「知らん！」

「えー？何？ただ働き？ひどーい」

「お前は慈善事業ということを知らないのか？」

「・・・？」

茜が何それという顔をする。

「・・・え！？知らないの？」

「と言うわけで2万円」

「ボランティアってことだ！！」

「なによ、こっちは慈善事業じゃないのよ！」

「知ってるじゃねえか！！」

第14話「泣き虫少年×スケバン前編」(前書き)

笑顔が素敵な君だからb y虎衛

第14話「泣き虫少年×スケバン前編」

「泣き虫少年とスケバン」

茜がげんなりとした表情で言う。

・・・スケバンって。

「渡井虎衛^{わたいこうえ}、美術部1年、人物画が得意。巳海^{みかいせん}羨^{せん}、2年、スケバンとして有名。以上だ」

「虎衛君は泣き虫で女顔で女子から人気がありましたよね」

「変わって羨とやはは私の傘下「関東スケバン連合」の元幹部」

「え？今なんて？」

「な、なんでもないよ、な！はじめ！」

「そ、その通りだ、耳違い・・・」

お前その耳違いって言い方やめろ。

早速依頼者の虎衛に会いに行く。

美術室

「す、すみませんここまで来てもらって」

超低姿勢で受け入れる虎衛。

「あれ？これって今描いている絵？」

茜が近くにある完成まじかの絵を指す。

背景は空をイメージとした青と白、

そして中央に描かれている笑顔の女性。

その目は優しく、口元は緩み、見る者を幸せにする力がある。

「・・・羨を描いておろう？」

はじめの言葉に正直耳を疑った。

「な！なんでわかったんですか！？」

「え！！嘘・・・これ羨？」

「失礼ですが・・・全く別人では？」

「いいえ、よく見てみますと・・・確かに羨さんですわ」

羨はスケバン、だからなのか常に無表情かメンチをきっている怖い顔。

正直、これほどの笑顔は見たこともない・・・。

「驚いた・・・ってこれ想像で描いてないよな？」

「そ！そんなことしませんよ！・・・一度だけ見たんです、羨さんの笑顔」

それは、入学する前、体験入学の時でした。

絵を描くのが好きな僕は、この美術部に憧れていました。

絵画はもちろん、彫刻や写真まで、最優秀者の人は必ず、

この学校の名前がありましたから。

初めて見て、この校舎を描きたいと思ったんです。

『バックはやっぱり空だな、角度はいいかな？』

スケッチブックに校舎のデッサンをして、

そんな時、川が目に入っただんです。

優しい流れで、透明な綺麗な水の流れる。

ふと、川に見入っていると・・・。

羨さんが土手で寝ていたんです。

まばらに咲く花の中で一人の女の人寝ているのは変でしたが、一目惚れをしたんです。

静かな、川の流れだけが聞こえる、緩やかな時間。

つい、羨さんに見入って、
スケッチブックに描きはじめちゃって……。
今思うと、恥ずかしいですけど、
書かずにはいられなかったんです。

『おい』

夢中で描いていた時、羨さんが行き成り起きたんです。

『なにやってるんだい？』

『え！？す、すみません！あ、怪しいものじゃないです！ただその
あの！』

『女のアンタが私に近づくななんて図々しいね』

『……ぼ、僕男です……』

一瞬沈黙が流れる。

『……そうなの？……ごめん、見間違えた』

いきなり口調まで変わって、ビクビクしている僕に言ったんです。

『なに？私に惚れた？』

「その時の笑顔がまだ忘れられないんです……」
真っ赤になりながら話す虎衛。

「まあ、告白すれば大丈夫だろ」

麗治がさらっと言う。

「そ、そんな、それができないから言ってるんですよ」

「案ずるな、何より強気乙女は強気男に惹かれるぞ」

はじめの言葉で少しやる気になる虎衛。

「でもやっぱりな」

「もう、意気地がないわね」

「だって、羨さん学校には来るんですけど・・・会えないんです」
「え？まさか入学してから一度も会ってないとか？」
「あ、いや、たまに会えるんですけど・・・そんな告白までは」
「とにかく、アタックが大切ですよ、勇気を出して！」
「サポートならしつかり出来ますから！ね！麗治さん！」
天然のところがいつもの様につい喋る。

「え？・・・だれでしょう？」

「ぼ、僕が言っただですよ！ね、ねえ！麗治さん！！」
ナイス悠里、上手く誤魔化す。

「あああ！さあ！羨の元へいざ！」

しかし、いざ探してみるとなかなか羨は見つからなかった。
体育館裏、保健室、倉庫、図書室・・・。

「い、いませんわね」

花鈴が音を上げる。

「も、いったいどこにいるのよ！！」

茜が痺れを切らし叫ぶ。

「そつえば、屋上行ってませんね」

「悠里よ、そんな安易な場所にあるものか」

「いや、わからない、いるかもしれないから行ってみよう」

「す、すみません、僕は運動場のほうへ探しに行きます」

「え？一緒に来ないの？」

茜がポツンと言った。

「ちょっと、立ち入り禁止場所には・・・」

案外ちよい悪の麗治たち。

仕方なく別行動で麗治達と虎衛は分かれた。

屋上

「おい、誰かいねえか？」

麗治が誰もいない屋上で言う。

「いるわけないですよ、スケバンなんてどこに身を潜むか分かりませんから」

悠里がそういうと、上から声がふってきた。

「失礼な言いようだね」

背筋が凍る、怒りと感じる声を聞いたのだから仕方がない。

「あたしに用かい？」

上を見れば屋上の唯一のドアの建物の屋根に羨がいた。

「・・・・・・・・」

黙ってしまっ一同。

「ああ！呼んだくせに用はないってか！？」

「まあ、落ち着け」

はじめが喧嘩師バージョンで話す。

「おや、珍しい、総長じゃん」

「実はお前を探している奴がいてな」

「知ってるよ」

面喰らっ一同、まさか虎衛の事知っているのか！？

「羽螺最刀（はひろさいとう）の連中が探してんだろ？あいつらしつこいんだよね、で？総長がタイムマン受けるって言いに来たんでしょ？」

「いや、全然違います」

麗治があっさり答える。

「渡井虎衛、知ってますか？」

「ん？ああ、あのかわいい子が、どうした？」

「お話があるらしいですよ」

悠里が答える。

「ん？話？・・・だが今日はちょっと無理だ」

「羽螺最刀の奴らか？オレが何とかしよう」

はじめがそう言った時だ。

「た、大変ですわ！！虎衛君が！！」

花鈴が下を見ながら言った。

「何よ？・・・あ、あれって・・・暴走族！？」

「何だって！？」

一番に飛び出したのは、羨だった。

第14話「泣き虫少年×スケバン前編」(後書き)

次回はアクションよ!! by 茜

第15話「泣き虫少年×スケバン中編」(前書き)

みんな　ひっさしぶり　b y c o r o

第15話「泣き虫少年×スケバン中編」

「おい、お前羨ってアマ知らねえか？」

なぜか校庭の隅に他校の不良生徒がいる。

傍から見れば暴走族の輩が虎衛を取り囲んでいる。

「せ、羨さんに何のようですか！」

臆病なのについ、羨の名前が出た事により強がってしまった虎衛。

「ああ？偉そうなアマだな？口の利き方がなつてねぞコラ」

スキンヘッドのグラサン男が睨み付けて言う。

「なあ、こいつあの女の子分じゃね？」

モヒカンの痩せた男がリーダーらしきゴツイ男に言う。

「ああ！そつか！お前頭いいなあ」

ろくに学校も行かず馬鹿ばかりやっている癖に頭がいいわけない
だろと思うが、

その暴走族軍団の全員がアホのため虎衛を女と勘違いした上に子分
と決め付け、

「おい！そこのお前！」

「ひい！な、なんでしよう？」

「羨に伝えとけ、子分は預かった、返して欲しくば町外れの廃棄工
場に来てな！」

「は、はい！」

適当な通行人の生徒にそう言い放ち去っていった。

「……連れ去られた？」

連れ去られるまでの一部始終を見ていた麗治達、

当然だが会話は聞き取れなかった。

ポー然とする麗治達だったが、学校の外に用意されていた暴走族た

ちのバイクのエンジン音で我に返った。

「な、なぜ虎衛が連れ去られたんだ」

羨が顔を下に向けつぶやく。

「・・・あ、あそこの男子生徒、確か最後暴走族と話していたよね」
茜が校庭を歩く生徒を見た。

次の瞬間、羨がもうダッシュで屋上から出て行く。
少し遅れて麗治達も羨を追いかける。

そして、

「こらあああ！！！！そこのおまえええええ！！！」

「ひいひいひい！！！！！」

怒鳴り散らし先程の男子生徒を羽交い絞めにし、

「言え！！何があった！！早くはけ！！！」

「ぐ！！ぐるじい！！がはっ！！！」

窒息一步手前ではじめが止めに入る。

「・・・って言っていました」

「ばかやるおお！！！！あいつは子分じゃねええええおお！！！！」

「ぎゃあああ！！！！なんでぼくをつぐふ！！！」

男子生徒は二度目の羽交い絞めを受け魂が昇天しかけた。

「・・・行くしかねえな」

男子生徒を放した後、早速羨は廃棄工場へ向かおうとした。

「だったら俺らも行くぜ」

はじめが喧嘩師のままで言う。

「いや、いいよ」

羨は断った。

「あたしの問題だ、自分で片付ける、それに、総長はいいが他の奴らは足手まといだ」

確かに西条姉弟は力はない、茜も一応女だし、オレは喧嘩なんてしたことがない、

返せる言葉もなく黙ってしまっ一同、
だが、

「関係ないな」

（あれ？何言ってるんだ俺？）

突如話し出す麗治。

「乗りがかった船だ、オレは戦うぜ」

（ちょ、え？何言ってるの？）

「こんな所で止まってられっかよ、なあはじめ？」

（まで！止まれオレ！どうなってるんだ？）

「ふ、言うじゃねえか麗治、そうだな、やっぱここは行かねえとな」

（ちょ、はじめ！）

「かつこいいです麗治さん！僕の方までがんばってください！」

（え？悠里何言ってる！？）

「素晴らしいですわ麗治さん！」

「麗治にしちゃ、今日はかつこいい判断ね」

（花鈴に茜まで・・・あれ？こころは？・・・まさか）

「天才の沖田、お前がそんなに言うとはな」

羨が目線を鋭くして言う。

「・・・はつきり言うぞ、お前の判断はバカのことだ」

「それは違うな」

（な、何を言うきだ・・・こころ・・・）

「私は天才だ！」

（・・・家に帰ったら説教な）

「・・・フツ、気に入った、来たい奴は勝手に来い」

そういつて、羨とはじめと麗治とこころが工場へ向かった。

廃棄工場

「兄貴、来ますかね？」

「来るだろ？こつちには人質がいるんだぜ？」

「でも、あの女冷酷非道だから見捨てるかもしれないよ？」

「……そうか！！！」 注意バカです

「ど、どうするんですか？」

「く、まさかこうなろうとは……売るか」

「人売りですか？確かに顔はいいから高く売れますよ！」 注意真剣にそう思っています

「よし、決まりだ！」

「わあああ！！人売りなんて今の時代あるわけないだろ！！」

ロープで縛られイスに固定された虎衛が叫ぶ。

「中国マフィアなら話を聞いてくれるか？」

「そうっすね」

「わああああ！！ってお前たち中国語はなせるの！？」

「あ、喋れない……」

「でもオレの従兄弟アメリカにいますよ」

「だからなんだああああ！！！」

虎衛が叫んでいた為、外では叫び声しか聞こえなかった。

だがその叫ぶ声が羨達には悲鳴に聞こえた。

「ご、拷問でもしているのでしょうか？」

いつの間にかいつものはじめ口調。

「まさかあいつら、虎衛がかわいいからっていやらしいことでも！？」

「なに！？それはまことか！！」

2人が話している間、麗治はこころと話していた。

（お前いつ人に憑く方法覚えた）

（なに言ってるんですか、憑けませんよ？）

（お前お気に入りの『世界のゴージャスケーキ写真集』燃やすぞ）

（き、キツネ様に昨日教えてもらって）

（キツネやローめ、変な事教えやがって）

（で、でも麗治さんって強いんですね？）

（喧嘩なんかしたことねえよ）

（えっ！・・・で、でもスポーツはなんか？）

（勉強ばつかでスポーツなんかできねえよ）

（・・・私、悪い事しました？）

（・・・いや、良い事ではあるが俺にとっては絶対良い事ではない）

（・・・ごめんなさい）

（・・・はあ、もういいよ、お前は特に気をつけないでいいよな？）

（んゝ、多分？）

「おい！麗治！虎衛は今いやらしい事をされているかもしれないんだ！」

「は？なに言ってるんだはじめ？」

「正面衝突だ！！」

羨が工場の門に向かって歩き始める。

それに続き、3人も後に並んだ。

「ギイイイイイー！！！」

スライド式の巨大扉を開けると、中では中央に虎衛がイスに縛られていた。

それを取り囲む無数の不良軍団。

コンテナが置かれただけの倉庫は不良で敷き詰められたといった感じだ。

ざっと見回し100？やべーよ、無理勝てねえよと思った麗治。だがさすが羨とはじめはゆうゆうとしている。

「おい、来たぞ？」

「あれ？来ないと思ったんですけどね？」

リーダーとモヒカンが喋る。

「うるせえええ！！この下等生物どもが！！！」

工場に響く怒鳴り声、羨は鋭い目線で相手をいびる。

「・・・へっ、2人ほど助っ人かい？・・・ほ、天才の沖田、喧嘩師はじめ・・・え」

「り、リーダー、天才の沖田に喧嘩師はじめてやばくないっすか？」

にわかに慌て始める羽螺最刀、だが・・・。

「な、なに言っ
てやがる！こっ
ちは235人も
いるんだぞ？
数で勝
てるって！」

「聞いたか？」

羨が冷酷に言い放つ、

「つまり、羨が100人俺が100人麗治が35人と虎衛を助け
やいいんだろ？」

(俺ノルマ35人!?少ないようで多いよ)

（よかったですね！ たった35人でいいんですよ！）

(うれしくない！)

「いいか、取り合えず2度と立てないぐらいにしとけ」

取り合えずでそれなら、本気出すと死ぬよ?と思った麗治だった。

「難しいなー、俺は二度と外を歩かせないぐらいなんだが」

ああ、こいつら外道、と思った麗治だった。

「やっちまえええええ！！！！！」

リーダーがそう言う。鉄の棒を持ったヤンキー達が襲い掛かる。

「ちょ！？武器あり！？」

「きな！相手にしてやるよ」

「久々に血が騒ぐぜ！」

すでにヒートアップな2人、

羨は相手の喉を突いたりみぞおちを殴ったり相手の急所を確実に叩

いている。

正直下手すると死ぬ急所ばかりだが……。
変わってはじめは喧嘩師の名の如く、顔面エルボ、顔面正拳、どこで習ったのか、

相手の鉄の棒を奪い見事な棒術……。。

で、麗治は必死に逃げていた。

「そもそも俺があんな化け物共と同じ力あるわけねえだろ!!」

（だからって逃げててもどうにもなりませんよ?）

「わかつてるそんな事!!くそっ!・・・ちっ」

階段を駆け上がる麗治、どうやら上には木箱が置いてある。

「よし、これを落とす」

いざ持つてみると相当重い、レンガがたつぷり敷き詰められているのだから当然だ。

「ああああ!!」

一気に木箱を階段から落とす。

木箱は勢いをつけ階段にいたヤンキーを掃砕、さらに途中で木箱が壊れレンガの雨が降った、それにより恐らくノルマ達成は出来たと思う。

「・・・・うわぁ」

（さっすが麗治さん♪ナイスファイト!）

嬉しくない誉め言葉を無視し麗治はレンガを2、3個拾って虎衛を救出に向かった。

「くっ、多いわ」

「なんだ羨、たったの62人でばてたのか?俺は73人、もうすぐ終わるぞ?」

「はっ、総長らしいね、でもすぐ追いつくわよ!!」

かかと落しで見事一人を倒した羨はまた、荒くれ者の中へ飛び込んだ。

「大丈夫か虎衛？」

虎衛の周りには既に誰もいなかった。

簡単に近づく事の出来た麗治は早々と縄を解いてやる。

「あ、ありがとうございます」

暗い顔の虎衛、なぜか助かったのに元気がない、

「どうした？」

問いかけつつ麗治は移動した、

虎衛もそれに続き安全な場所へ行く。

「その・・・うれしくないんです」

ポツリと呟いた虎衛の言葉に、麗治はなんとなく理解し、
こころはどういうことなのかさっぱり分からなかった。

第15話「泣き虫少年×スケバン中編」(後書き)

次回、虎衛の真意が明らかに。

第16話「泣き虫少年×スケバン後編」

（う、うれしくないって！どういことですかー！！）

ところが麗治に叫ぶ。

（落ち着けて！・・・考えてもみる、羨は傷ついてるんだぞ）

（え？、羨さんが？）

ふと、戦っている羨をみる、

いくら強いとはいえ、殴られた後や、切り傷やあざがある。

（でも、でも！それは虎衛さんを守るためで、それを喜ばないのは最低ですよ！？）

（逆だろ？女に守ってもらって喜ぶ男なんて最低だろ？）

（そ、それは・・・）

「おらああー！」

はじめが最後のヤンキーを殴り飛ばした。

周りは気絶か激痛で倒れている者ばかり、

その中で、唯一立っていたのが、羨とはじめだった。

「やるね、総長」

「へつまあな、さて、さっさとここをおさらばしようぜ」

工場を離れる、歩いて学校へ向かう途中、妙に静かだった。

誰も喋らない。

なぜなら、虎衛からなぜか黒いオーラが出ていて、

麗治はおろか、羨すら戸惑った様子だ。

学校

気まずい雰囲気のまま学校へ着く、

「で、では我はこれで、ごめん」

はじめが元の口調に戻り早速退散。

それに続き麗治も、じゃあと言って帰った。
そして、虎衛と羨の2人だけになる。

（い、いいんですか？2人つきりにして？）

（そりゃ、そうするしかないだろ？気になるなら見てこいよ）

（そ、そんな盗み聞きはいけませんよ）

（じゃあ、ほっとくしかないな）

（あ、私ちよつと用事が・・・）

少し笑って麗治は答えた。

（そうか、じゃ、行つてこいよ）

一方、羨と虎衛は今だ沈黙状態だった。

「ケガしてますね」

ふと虎衛が声を出す。

「おっ！？・・・おう」

あまりにも張り詰めていた空気だった為ビクビクする羨、
「保健室に行きましょう」

保健室

「じつとしていて下さいよ」

消毒液をつける。

「いたつつ、つー！」

膝や肘のすり傷を綺麗にし、最後はバンソウコをはった。

「なあ、怒ってる？」

羨は虎衛からの黒いオーラが怒っているとらえた。

「うゝん、そうですね、怒っていないと言えば嘘になりますし」

虎衛の返事は中途半端で羨は更に緊張する。

「正直、女の子なんですから危ない事は控えてください」

「お、おう」

「助けてくれたのにはありがたいですけど、僕はあなたが心配なんですよ」

「おう」

ふと、また静かになる。

そして、

「すみませんでした」

羨の耳に聞こえたのはその言葉だった。

虎衛は真剣な眼をしている。

「好きな女子に助けられる男なんて頼りないですけど、僕は、あなたが好きです」

羨は少し間をおいてから今の現状を理解した。

告白されている、と。

「・・・・・・・・」

顔が真っ赤になる、何をすればいいのか分からない。

ただ、虎衛の言葉だけが頭に響いた。

「僕は・・・強くなります、あなたを守るくらい、幸せに出来るくらい、強くなります、僕のこの気持ちには、本当です、だから・・・あなたとずっと一緒にいていいですか」

羨は虎衛を直視できず、顔をそらしたが、その時確かに——はい——と返事をした。

屋上

そこにはもうはじめと麗治しかいなかった。

そこへ、こころが帰ってくる。

「どうだった？」

「・・・はい、うまくいきました！」

本当に嬉しそうに、こころは言った。

「ほらやっぱ、覗きにいったんだ」

麗治がイタズラな笑みを浮かべる。

「ええ！」いや！その！そんなことは」

「はあ、こころよ、我は信じていたのに、心外だ」

「だ、だから別に覗いてませんよ！」

怒るこころのそばで、はじめと麗治は笑っていた。

第16話「泣き虫少年×スケバン後編」（後書き）

すみません、作者の諸事情でまた更新が減ると思います。出来る限りがんばりますが、気長にお待ちください。申し訳ありません。

第17話「幽霊君×おっとり少女前編」(前書き)

ひさかたなりbyはじめ

第17話「幽霊君×おっとり少女前編」

「みんな、幽霊って・・・いると思う？」

茜がイタズラな笑みで言う。

・・・いるじゃん、こころが。

「な、なんですか茜さんいきなり？」

悠里がもつともな発言をする。

「実は！今回の依頼は幽霊騒動なんです！」

とうとう恋愛相談から外れたよ。

「依頼人は菊咲麗佳きくさきれいか、歴探同好会部長3年、以上」

「れきたんとは、確か歴史探偵同好会ですわね」

「フム、聞いたことない」

「え？はじめさん生徒なのに知らないんですか？」

「フツ、こころよ、この文校にある倶楽部全てでいかほど分かるか？」

「ん？今まで見たのはサッカーとか園芸部ですから・・・20？」

「部、同好会合わせきつかし64倶楽部なり」

「・・・中途半端に多いですね」

「珍しく同意見だな」

「で、依頼内容かというと！・・・ずばり幽霊の正体を確かめて欲しいということなの！」

「まで！恋愛でもなんでもない依頼をなぜ引き受けるんだ！」

さすがに納得のいかない麗治、

「こっちは何でも屋みたいになんでもするわけじゃねえんだよ！一応

縁結びなんだからそういう仕事かしねえよ！それに幽霊だと？いるわけないだろこの科学の世の中によ！！」

「え？いるじゃん、こころちゃんが？」

あっさりと返す茜。

「ちっ、気づいたか」

「あ、今麗治私のことを馬鹿にしたでしょ」

究極の勘で心の声を察知する茜。

「ん？何の事だ？ほらさっさと依頼人の所へいくぞ」

どうも様子のおかしい麗治だったが一行は依頼人の下へ。

歴史資料室

昔の古文書やら書物やら絵やらが置いてある歴史資料室。また歴探同好会の部室でもある。

「どうも、依頼人の麗佳です」

花鈴とよく似た上品なお嬢様気質の人に見える。

そして周りには同好会メンバーが3人ほどいた。

「それで、幽霊騒動ってどういうことです？」

早速麗治が本題を切り出す。

「はい、一週間前の事です・・・」

つい中国の陽帝に関する文献を研究していたら遅くなってしまった。

ここの部屋校舎の一番奥ですから見回りもめったにこないんです。

外が真っ暗だって気づいてすぐ帰ろうとしました。

資料室を出るともう電気は消されていて、

夜の学校は真っ暗で本当に不気味でした。

でも帰らなければならぬので廊下を歩いていると、

自分のとは違う足音がしたんです。

先生かまだ残っている生徒だと思ったんですけど、

その足音変なんです。

妙に響くと言うか、普通の足音じゃないんです。

「コツーン・・・コツーン」

ゆっくりでしたけど、近づいてくる感じがしました。

私、怖くなって走りました。

すると、足音も急ぎ始めたんです。

「コツーン・・・コツーン・・・コツーン、コツーン・・・」

なんだか、不規則と言うか、バラバラな感じな足音で、

振り向きたかったんですけど、どうしても振り向けなかったんです。

怖くて、本当に怖くて、

そして、また、異変があつたんです。

いくら進んでも、真つ暗な廊下があるだけで、

どんなに進んでも下駄箱にすらたどり着けなくて。

もう、怖くて泣いていました。

そして、助けてって、強く思つたんです、そしたら、

「こっちだ！」

誰かが前のほうの教室のドアから手を振っていたんです。

男の子の声で、姿も普通だったから、生徒だと思いました。

すぐその子の元へ走って教室に入つたんです。

「しっ！静かにして」

その子の言う通り泣き声を止めて息を止めました。

そうして、何かが教室の前の廊下を通っていました。

あいからわずの足音で通り過ぎてホッしました。

男の子は震えていた私を抱きしめていてくれて、

「もう、大丈夫だよ」

そう言ってくれました。

「下駄箱に連れて行ってあげる」

その声を最後に、私は下駄箱に立っていました。

いきなりでビックリしたんですけど、周りには誰もいなかったんです。

あの男の子も・・・。

「・・・・・・」

なぜか沈黙している麗治。

「あ、あの？どうかされました？」

麗佳が声をかける。

「ん？なに？麗治固まつてるの？」

「だ、大丈夫ですか！？」

悠里が麗治を揺さぶる。

「ふむ、深手を負ったな」

「も、もしかして麗治さん・・・」

「怖いのが苦手なんですか？」

こころまで声をだしてしまった。

だが麗佳は気づかなかったようだ。

「うーん、仕方ないわね、ほっときましょう」

茜はあっさり見捨てる。

「で？依頼はその幽霊を捕まえるの？」

茜の質問に麗佳は慌てて答える。

「いいえ、捕まえるんじゃないくて、できれば、男の子にお礼を」

「お礼と申しても、霊魂なのであろうそやつは？」

「でも、やつぱ忘れられなくて」

「うんうん、じゃあ！まかせて！早速今夜学校に乗り込むわよ！！」

「までこらー！！」

飛び起きる麗治。

「あ、起きましたね麗治さん」

悠里の言葉を流して麗治は言った。

「俺は今回降りるからな!!!!!!!!!!」

第17話「幽霊君×おっとり少女前編」(後書き)

次の投稿いっしょう？by悠里

第18話「幽霊ちゃん×謎の少年中編？」（前書き）

話が崩れていく!?

第18話「幽霊ちゃん×謎の少年中編？」

屋上

今ここには麗治とこころしかいなかった。

なぜならば、降りると言った麗治がそのまま逃げてきたからである。

「・・・あの、麗治さん？」

「なんだ」

恐る恐る話しかけるこころに雑に返事をする麗治。

「・・・幽霊、怖いんですか？」

「・・・まあな」

「・・・な、何ですか？」

「幽霊が怖い理由は怖いからだろうが」

「・・・わ、私は平気なんですネ」

「始めは怖かったがな」

「そ、そうなんですか・・・」

フェンスにもたれる麗治は夕焼けを見ていた。

こころは体操座りで麗治の隣にいた。

「あ、あの・・・」

「なんだ」

「・・・機嫌直してくれませんか？」

「・・・そうだな、ところで、あいつらなんか言ってたか？」

「茜ちゃん達ですか？・・・今夜学校に乗り込むって・・・」

「はあ、そうだと思ったよ」

「・・・麗治さん」

「なんだ？」

「・・・実は・・・この学校にいる幽霊、かなり性質たちが悪いんです」

ポツリと爆弾発言。

「はああああ！！！！？マジか！？本当かそれ！」

「はい、一応私も幽霊なんでわかります、結構ドス黒いです」

「・・・茜達を止めるべきだよな？」

「無理です、茜ちゃんやる気満々だし、はじめさんがいるからって」

「でもあいつ幽霊見えないんだよな？」

「靈感ゼロです」

「・・・その幽霊って、茜達に危害加えそうか？」

「・・・あの、実はその所から話がややこしくなるんです」

「なに？」

「さっきもこれをどうやって説明しようか悩んでて」

「説明に悩むって、どんだけ馬鹿なんだよ」

「取りあえず聞いてくださいよ、実は・・・」

そして、麗治は本当の事実を知る。

「・・・やばくないか？」

「正直、幽霊のエキスパートでもないけど・・・」

「だったら、いい奴がいるだろ」

そう言うのと麗治は動き始めた。

夜の学校

それは、まさに現実世界から切り放されたかのごとく、静かである。いつも見る様子と違うというのは、それだけで恐怖感を感じさせる。

「いい？みんな揃った？」

茜が楽しみで仕方ないように明るい声で言う。

「奇怪なモノを前にして揚々とするとは、やはり只者ではないな」

はじめがボソリと呟いた。

「でも確かに、怖いですけどワクワクしますね」

悠里が好奇心の光る目で学校を見る。

花鈴はさすがに怯えているのか目が白くなっている。

そして、依頼人の麗佳がいた。

「さて、まあ頭脳である麗治と肝心なところちゃんがないけど、キューピットクラブ出陣！」

「え？こころちゃん？どなたなんですか？」

「え？あ、うん、あれよ、麗治の妹」

「へえ、妹さんがいらつしやるんですね」

危うくところがばれる所だったと茜達はあせったが、悠里だけ何か違和感を覚えた。

「あれ？・・・確かこの人、幽霊見たのに、こころさんは見えないのか？」

変に思ったが、特に気にもとめなかった悠里だった。

麗佳の見たと言われる幽霊の出現位置はいまいち特定できないためあの日の再現をする作戦を立てた茜、はじめ達もそれに納得しまずは資料室へ向かった。

はじめが管理人を操り玄関を開けたままにしたお陰で侵入はできた。そして、目的の場所にも到達。

歴史資料室

麗佳はあの日と同じ感じがした。

直感ともいえる感性が働いたとでも言うようだ、あの時と同じだ。暗い廊下には何もないはずなのに何かが見えた気がした。

「さて！じゃ、探すとしますか！」

茜が先頭を切って行く。

麗佳の話によるとまずは生徒玄関を目指したそうだ。

生徒玄関までは少し遠い、謎の場所に入る可能性は十分にあった。歩いて進む、茜達はなんとも思わず進んでいたが、花鈴は違った。弟の悠里に引っ付きながら歩く、

「姉さん歩きにくいよ」

「お願いだから見捨てないで！怖いの！怖いのよ！」

すでに涙目の花鈴。

よほどビビっているようだ、それなら来なければいいのにと悠里は思った。

そんな花鈴が、異変に気づいた。

後ろから何かの足音がする。

片足を引きずるような、歩み寄ってくる足音。

「ゆ、ゆ、ゆゆゆゆゆり」

「そのリアクションだと幽霊が出たって感じですね」

「あ、あ、あああああししあしあしあしあしあ」

「足音ですか？成る程、足音が後ろから聞こえてくると、フフ、姉さんは臆病だね、普通幽霊だったら足はないでしょう？つまり幽霊ではない、ってことは人ですよ」
そう言いながら振り返る悠里。

すると、一メートルほど後ろにガイコツの戦国鎧を着た武士が日本刀を持って片足でこっちに向かっていた。

足が一本しかない、故にけんけんで寄って来ている。

表情など分かるわけがない、ガイコツなのだ、骨である。

だが日本刀を持っているのはかなり恐怖であった。

それ以前にマジで怖かった。

花鈴も一緒に振り向いたようだ、口から泡を出している。

「・・・茜さん、僕達帰らせてもらいます」

悠里は焦点のあっていない目で姉を担いだままダッシュして茜達を抜いていった。

「え？あ、ちょっと？」

いきなりの事で止める事もできず行ってしまった悠里と花鈴。

茜はぶつぶつ言いながら前へ進んだ。

しかし今度は麗佳が気づいた。

「あ、あ、ああああかあかあかあかあか」

「なに？茜ちゃんかわいい？そりやそうよ」

「ちがちがちがちがい」

「え？血がいつぱい？なに、鼻血？」

「う、う・し・ろ」

やっとの事で単語を言えた麗佳、茜はくるりと後ろを向く。

そしてガイコツの戦国武将。

「ふ、現れたわね古より今尚現世に存ずる悪霊よ、天と地が変わらずとも時代は変わる、そなたの肉体も果てているのだ！今こそ黄泉へ帰りけり！悪霊退散！」

常人ではできない行動をやったのけたうえに御札を取り出す茜。

突如ガイコツの戦国武将が苦しむように地面にひれ伏した。

「す、すごい」

「茜ちゃんパワーをなめるなよ」

まさに優勢に見えた、のだが、

「なんちゃって」

ガイコツが喋った。しかもお茶目に。

茜と麗佳は真っ白になり、石になった。

だが次の瞬間目にも見えぬ速さで生徒玄関を目指して走った。

ガイコツは笑った。

舌もないのに笑った。

顎が動いていた、その光景は奇妙の一言だった。

そして一人取り残されるはじめ……。

「はて、なんであろう？ 固まりかと思えば矢の如く脱兎だつとしおつて」
そう、完璧にはじめはこのガイコツを見ることができなかった。
故に感じることもどうする事もできない。

「・・・我はどうすればいい？」

ただ一人で突っ立ってる事しかできなかった。

茜と麗佳が走っている。

そして既にあの不思議な空間へ迷い込んでいた。
走っても走っても廊下が続く。

麗佳は前は気づかなかったが教室のプレートがあることに気づく。

「3 2 4 5 6 - 9 8 7」

「な、なにこれ！？」

その数字を見ると、なぜか更に恐怖心が増幅した。

茜も気がでないようだ。

初めて顔に恐怖に怯える様子を表した。

麗佳はあの時と同じ願いをした。

「助けて！」

いつの間にか口にすら出して言っていた。

今尚走り続ける2人。

体力は限界に近づいていた。

だが、麗佳はまた感じた。あの時の感覚を。

「こつちだ！」

前方の教室から、あの少年が手を出していた。
麗佳は笑顔になった。

安堵の気持ちと、また、彼に会えた喜びから。

教室内で息をゼイハア言わせながら茜と麗佳は床に座っていた。

「ま、また、助けてくれたね」

「・・・うん」

大人しそうなショートカットの少年。

可愛い顔をしている。

茜は彼が幽霊である事を分かっていたが、そんな感じがしなかった。幽霊にしては幽霊っぽさが感じない。

茜はそう思っていた。

しばらくその教室で休んでいた。

その間特に会話はなかった。

その沈黙を破ったのは少年だった。

「さて、そろそろ帰ろうか」

少年がポケットに手を入れた、そして、何かを取り出した。

茜にはそれがお札に見えた。

しかし、それは一瞬で燃えて塵と化した。

「やめてよ、よう君」

茜は背中を凍らす思いをした。

麗佳が、黒いオーラを出しているからだ。

それは雰囲気ではなく、目に見えるオーラ。

「よう君、ひどいよ、あっちの世界へ連れて行くつもりなの？」

「もう、約束の時が来たんだ、わかってるだろ？」

「・・・わからない、わかりたくない！私はまだ死にたくない！友達ともっといたい！よう君の彼女であり続けたい！」

「麗佳は、たった一人の僕の彼女だよ、今までも、これからも」

「でも一緒にいれないじゃない、だから・・・ごめんね茜ちゃん」

第19話「幽霊少女×呪術師少年後編」

「麗治！」

茜が教室のドアに立つ麗治を見て笑顔になった。

それと同時に麗佳と少年も麗治を振り返った。

「あら、誰かと思ったら、臆病な天才沖田さんじゃないの」

「これはこれは、麗佳さんキャラ変わってますよ？」

落ち着いて話す麗治だがよく見ると体が震えていた。

「フッフ、沖田さん、体が震えていますよ」

「まあな、人の命を盗ろうとする相手には誰だって恐怖心を抱きますよ」

「あら、そう？・・・どうやら冥界へ送る魂が増えちゃったみたい」

「麗佳！だめだ！やってはいけない！」

「よう君は黙ってて・・・大丈夫、寂しくないように、西条姉弟とバカ陰陽師も後で逝かせるからさ」

目が大きく開いている、瞳孔が開いているからかその目は異常に見えた。

少年は耐え切れず麗佳に近づこうとした、だが、麗佳が少年を睨む、
「れ・・・・・・・・」

金縛りだった。動けなくなった少年につこり笑みを浮かべ、麗佳は麗治を睨んだ。

「私とよう君の仲を引き裂く事は、誰にもさせない」

黒いオーラの中にも、一途な恋心が垣間見えた。

「別に引き裂くつもりではありませんよ、あなたの間違いを正しに来たんです」

「私の間違い？・・・フン、みんなそう言っわ」

少しばかり、麗佳の顔つきが厳しくなった。怒りが増したと思われ

る。

「何で、なんで私は幸せになっちゃいけないの！！何で私は死ななきゃいけないの！！何で私は好きな人と一緒にいけないの！！私だけ、何でこんなひどい目にあうの！！」

涙はもう枯れ果てたのだろうか、

悲しみの雫は流れなかったが、それと同等の怒りをあらわにした。

「・・・ま、生きているあなた達の何を言っても無駄ね、でも、死んでから分かるものなのよ、本当の幸せって」

「・・・あんたの本当の幸せって、なんだ？」

麗治が静かに口を開く。

「言ってるでしょ、私の本当の幸せは、友達やよう君と一緒にいる事よ！」

「・・・なぜ一緒にいたいんだ？」

「楽しいから、そこが、私の居場所だからよ！」

「・・・あんたはその居場所のために、一緒にいたい奴を困らすんだな」

麗佳の表情が一瞬曇った、だが、すぐ怒りの表情になる。

「だから分かってないって言ってるのよ！！あなたは生きているからそんな事が言えるのよ！」

麗佳が麗治の首を絞めようと手を出しかけたとき、麗治が言った。

「少なくとも、こころは死んでお前と同じ境遇だが、わがままなど言っていない」

麗佳の動きが止まった。

「わ、わがままって」

「お前の言っている事は、わがままだ・・・あんた、『死』ってどんなものか分かってるのか？」

「あなたに何がわかるの！」

「死つてのは悲しいものだろうが！死んだものもその周りの人間も悲しませる事だ！これぐらい誰でも分かっている事だろうが！！」

麗佳はまだ止まらず麗治の首に手をかける。

「今のあなたは悲しむ人間を増やすだけだ！自分の都合で人間を殺すなんて最低な行為だ！」

「うるさいうるさいうるさいうるさい！！！！」

手に力が入る。それでも麗治は言葉を続けた。

「第一！今あなたのやっている事は！あなたを好きだった人を悲しませる行為だ！今までのあなたと違うあなたを！これから好きでい続けてくれると思うのか！」

麗佳の顔が初めてもとの麗佳の顔になった。涙も出ていた。

だが、その顔はすぐ消えてしまった。

別の表情が現れた。鋭い眼つきで麗治を睨む。

「シネ！シネ！シネ！」

声まで変わった、もう麗佳ではないと言う事に、茜も気づいた。

「ぐがっ！」

麗治はまだ首を絞められている。

「やめて！れ、麗治が・・・麗治が死んじゃう！！！」

茜がそう叫んだ時だった。

その時、念仏の様なものを唱える声が聞こえた。だが、よく聞くと、もっと別のものだった。

「闇帰れという、光何処かと問う、時は過ぎ、過去は過去、今は今、全ての理はそれを望む、死した魂、帰るがいい」
女性の声だった。麗佳の様子が変わる。

何か苦しむように麗治から手を離し、耳を押さえる。

すると、いつの間にか黒い長髪の女性が麗佳の前に立っていた。
巫女の服装をしたその女性は手を麗佳の上に載せる。

「死した魂、あの世へ帰れ」

黒い気配が麗佳からあふれ出た、そして人の形を創った。

「ありがとう」

いまいちどんな人だったかは分からなかったが、黒い気配は白に変わり、少しずつ薄れて消えていった。

「成仏」

巫女のような女性はそう言って手を合わせた。

「すまんな小僧、少し遅れた」

巫女は少し笑いながら麗治に話しかけた。

「はっ、遅いぜキツネ」

そう言いつつ、麗治は茜に歩み寄った。

「大丈夫か？」

顔を覗き込むと、

「・・・う・・・う」

まだ泣いているようだった。頬は赤く麗治は初めて見る顔だった。

「なんだ、かわいい顔するんだな、お前も」

「・・・バカ！」

茜は鳴きながら麗治に抱きついた。

まだ教室には麗佳と少年が残っていた。

少年は金縛りが解けるとすぐ麗佳に走りよった。

「麗佳！麗佳！」

黒い気配を出した後、麗佳はすぐ倒れた。

その麗佳を抱き起こし揺さぶる。

幽霊なのに触れる事ができるのはおかしいはずだ。

しかし、それは期限付きの蘇^{よみがえ}りだからである。

「・・・よ、よう・・・君」

ゆっくりと目を開けた麗佳はそのまま少年を見上げた。

「死んだ者の魂を肉体と共に蘇生させる、『生術』を使ったね？」

キツネが少年と麗佳を見て言った。

「馬季陽介、美術部三年、呪術家で有名な『馬季家』の長男だね」
麗治が少年について話す。

「そして、本当は一ヶ月前に交通事故で死んでしまった、菊咲麗佳、彼女を生き返らせたのも、あなただ」

「でも、この術はたまに変な霊を連れ込む事があるんだよ、お陰で、死ななくてもいい人間があの子へ送られそうになっちまったよ」

キツネが厳しい顔で2人を睨んだ。

「すみません、僕が悪いんです、呪術もわかっていない素人なのに
変な事をして」

陽介が真剣な顔で謝った。だが、腕はしっかりと麗佳を抱いていた。

「さて、その子をあの世へ返さないかね」

キツネが麗佳を見て言った。

予測はしていたが、明らかに二人は傷ついた。

また、別れる事になるからだ。

「・・・わかってるんだろ、仕方の無い事さ」

キツネは冷たく言う、そして、麗佳が陽介の手を振り解いた。

「・・・ありがとう、よう君、事故でいきなりだからさよならがで
きなかったけど、今なら言えるね・・・バイバイ」

泣き顔は見せなかった、笑顔で、陽介に手を振る麗佳。

「・・・麗佳・・・麗佳は、僕の、最初で最後の、好きな人だから
！」

陽介が泣きながら言った。

キツネが何か唱えていた。きっと成仏させる言葉なのだろう。

麗佳がボンヤリ透けてきた。

麗治と茜は静かに二人を見守っていた。

麗佳から、光が放たれる、そして……。

「…………あれ？」

麗佳はまだ残っていた。

姿が透けているので幽霊なのであろう、だが、成仏できていない。

「……おい、ようとか言う小僧、何をした？」

キツネが睨む先で陽介は腹黒な笑みをしていた。

「……は？」

麗治が固まる。

「フッフ、僕は呪術家の跡取りだよ？……これぐらいの芸当でき
て当たり前」

「うおい！お前さっきとキャラ違うぞ！なんだその腹黒な性格は！
！」

麗治が陽介の襟首を掴む。

「やだな……誰になんと言われようと好きな子とはずっと一緒
にいたいから、僕が死ぬまで一緒に呪いをかけたままでよ」

「だったらお前をここで殺していいか？いいよな？」

「わ、私って……どうなるの？」

「ま、この小僧が死ぬまで幽霊だね」

「…………帰ろ」

茜は一人でそそくさと帰った。

「おい、待てって」

学校を出て一人で歩いていた茜に麗治が追いついた。

「なによ？」

「なにつて、泣き虫な茜ちゃんを夜道一人にしたらかわいそうだか

ら」

一発殴る茜。

「悪かった、でも、心配だから、送ってやるよ」

静かに夜道を歩く2人。

「・・・花鈴や悠里、はじめはどうしたの？」

「花鈴と悠里は無事家に帰ったよ、はじめは危うく戦国武将にとりつかれそうになったがキツネが何とかしてくれた」

「こころちゃんは？」

「家にいる、成仏させる時巻き込まれるから来るなって言われた」

「そう・・・」

「・・・」

2人は黙って歩いていた。

茜は何か言いたそうだったがもじもじしている。

「・・・なあ、茜」

「な、なによ」

「・・・お前が絶体絶命の時、俺の名前呼んだよな」

「そ、そうだった？」

赤くなる茜をよそに、麗治は話を続けた。

「・・・また困った時、いつでも呼べよ、守ってやるから」

「・・・バカ、もうこの茜様に困る事なんて無いわ！・・・でも、ありがとう」

頭から湯気が出るくらい赤い茜を見て、

麗治は笑った。

第19話「幽霊少女×呪術師少年後編」(後書き)

もしかするとこの話が一番意味分らないかもしれません。by作者

第20話「デート護衛前編」

桜の開花はまだだが、暖かい陽気になってきた。
そろそろ春が近づいているようだ。

屋上でのんびり空を見上げて横になっているキューピットクラブのメンバー。

「のどかですね」

こころがのほほんと感想を洩らす。

「いよいよ春日和というわけだな」

はじめが流れている雲を見ながら言った。

「おいおい、のんきなのはいいが明日ごろにはまた寒くなっているんだぞ」

麗治が平和ボケの二人に言う。

「そうですね、春になる前って、暖かくなったと思ったらすぐ寒くなるんですよ」

悠里が笑いながら言う。

「ところで、なぜ陽介君がここにいるのですよ？」

花鈴が異質の存在、陽介を指摘する。

「いや、麗佳にも友達は必要だと思って」

「成仏させてやれば友達はいくらでもいる」

「おいおい、部長、冗談きついで」

「部長と呼ぶな！そもそもお前の行為は人の道を外している気がする」

「愛を貫くためなら外道と呼ばれてもかまわない」

「黙れ」

麗治がぶち切れ寸前で茜と麗佳が入ってきた。

「みんないるようね！早速依頼よ！今回はデートの護衛よ！」

「もう何でも屋みたいだな・・・」

「岡田正志サッカー部2年、山田美由サッカー部マネージャー2年、おかただだし やまだみゆ以上」

麗治が淡々と話す。

「デートの護衛？おいおい、この二人は誰かに命でも狙われているのかい？」

陽介が外人のわからないというジェスチャーをしながら笑う。

「まあそんな感じね」

茜が黒い笑みを浮かべながら言った。

「この美由って人、サッカー部の美少女マネージャーでサッカー部の憧れの的なの、その娘と付き合うことになった依頼人はサッカー部員からひどいいじめを受けているわ」

「腹いせにいじめるなんてひどいですね」

「ふ、野蛮な男達は未練がましいって事さ」

陽介の反応にストレスを感じ始めるメンバー。

「とにかく、明日の遊園地でのデートをどうしても成功させたいそうだ、まあサッカー部員達を説得するのが手っ取り早いな」

麗治がそう言うのと、一同はサッカー部の部室へ。

サッカー部部室。

練習も終わり、部室に全員いる様子のサッカー部。

「正志さん練習に来てないようですね」

「来たら殺されるもの」

花鈴の疑問にさらりと答える茜。

部室のドアを開けようとする麗治、すると、はじめが止めた。

「いきなり入ったとしても話を聞かない可能性がある、ここは窓から様子を見よう」

その提案に全員賛成して窓を覗き込むメンバー。

すると中ではサッカー部一同がなにやら話していた。

「正志の野郎、いよいよ明日、我らの女神、美由ちゃんとデートす

るそうだ」

「あの悪魔め！許せねえ！」

「俺達の女神を奪うなど！許せるはずが無い！」

「だからこそ、明日のデートは見事にぶっ壊し、正志を血祭りに上げる」

「おお！そうだそうだ！」

「せ、先輩、明日は大事な試合のはずじゃあ？」

「うるせえ！試合より愛だ愛！」

「そんな、他人の恋路を邪魔するのは外道ですよ」

「愛を貫くためなら外道と呼ばれてもかまわない！」

話を聞いていたメンバー。

「最後の台詞、陽介さんが言ってたね」

「こころがのんきに言う」

「いや、それはあいつらと陽介が同レベルだから気にしない」

「え？ちょ、ひどくない？」

「むしろあいつらをどうすれば説得できるかが問題だ」

陽介が隅でいじけていたが気にせず部室へ入っていく麗治。

扉を開けるとサッカー部員達が一斉に麗治を見た。

「悪いがサッカー部の皆さん、明日は大人しく試合に出てください」

「なに？貴様、さては我々の話を盗み聞きしていたな」

「そうです、というか男なら新しい恋を始めたらどうですか？」

「うるさい！お前に何がわかる！」

「そうだそうだ！」

「美由ちゃん俺達にいつもドリンクを配ってくれていたんだ！」

「それに大会の時はいつも見に来てくれた！」

「がんばれて応援までしてくれたんだぞ！」

「それはつまり俺達に好意があるからなんだ！」

力説するサッカー部員達をみて麗治は冷静にこう言った。

「いや、マネージャーだからだろ、勘違いしすぎだ」

一瞬止まる部員たち。

後輩の一年生達は溜め息をついている。

少しすると、部長らしき人物が動き出した。

「そ、そんな、そんなわけねえだろおお!!」

「・・・どこが？」

「お前さては正志から雇われたPCだろ！」

「PC？なんだそれ？」

「キューピットクラブだ！」

「そんな略語になるほど有名になったのか？」

「お前らのファンクラブ潰しは有名だぞ！」

「あゝ、そういえばたくさん潰したなあ」

「みんなのアイドルを奪う外道な組織め！とうとう俺達にまで手を出すか！」

「いいだろう！明日のデート！守れるものなら守ってみやがれ!!」

「お前みたいな心が無くて頭だけいい人間に俺たちは負けねえ！」

もう止めようが無い事を悟った麗治は部屋を出た。

屋上

「ど、どうするの麗治さん？」

麗佳がなぜか空を見てボーっとしている麗治に声をかけた。
だが返事が返ってこない。

「どうしたのでしょ？」

「心が無いって言われて傷ついた？」

「あやつはそんなにもろくなかろう」

「ふ、サッカー部員達の究極の勘違いに、ここまで醜い人間は見たこと無い、と思いい心に傷を負ってしまったのだらう」

「なんだかそれっぽいですね」

少しすると麗治が空を見るのを止めて茜達に振り返った。

「めんどろだが、明日デートを守るためいくしかないな」
麗治はそう言って集合時間を言って家に帰った。

沖田家

「ねえねえ、麗治さん」

「なんだ？」

部屋でくつろいでいると、こころが麗治に質問をした。

「空眺めている時から元気ないですけど・・・どうしたんですか？」

「・・・実はな」

「コンコン」

突如麗治の部屋の扉をノックする音がした。

「麗治、入るよ」

そう言って入ってきたのは麗治の姉だった。

「なに？姉さん」

「明日の私のデートの護衛についてなんだけど」

こころがその言葉を聞いて怪訝な顔をする。

「ああ、はいはい」

「彼氏の所属しているバスケット部の全員がなんでも明日の試合放棄し
ても邪魔しに来るみたいでさあ」

「デジャヴ？」

こころが頭の中で呟く。

「わかったわかった、なんとかするよ」

「じゃ、頼んだから、やっぱ持つべきものは天才な弟よね」

笑いながら部屋を出る姉。

「・・・このことで元気が無かったんですか？」

「バスケットにも交渉に行っただけどサッカー部と同じこと言っていた」

「お姉さんはマネージャー？」

「女子バスケット部のキャプテン」

「そうなんですか、でも明日どうするんですか？」

「どうするもなにも、やるしかないだろ」

麗治はそう言つてカーペットに布団を敷いた。

「ところがベッドで寝るのでいつもそうしている。

「おやすみなさい」

「ああ」

そう言つて電気を消した。

第21話「デート護衛中編」

遊園地 朝8:30

入場ゲートに正志と美由が合流、そして入場。

その10分後、麗治の姉と彼氏が入場。

その1時間前に既にFC「ファンクラブ」とPC「キューピットクラブ」は入場していた。

「こちらFCサッカー部対抗隊の茜です！クライアントの二人はジェットコースターに乗る模様！その後ろに露骨に怪しい集団発見！どうやらクライアント同士と一緒に座らせない作戦を取る模様です！」

ジュットコースターの前にはサッカー部員の集団となぜか黒いスーツの茜に悠里に花鈴と麗佳がいた。そして小型のイヤホン式通信機で麗治と連絡を取っていた。

了解、集団で襲って隣同士にしないって、幼稚な抵抗だな

「いえ！甘く見てはいけません！ジェットコースターでカップルが一緒に乗らずしてどうするんですか！すでに戦場なんですよここは！」

いや、違うから。

「とにかく！どうすればいい？」

そうだな、取りあえずクライアントに近づいて合流しろ、後は乗るとき邪魔しに来るサッカー部員を倒すしかないだろ

「了解！では、いってきます！」

早速正志たちに近づく茜達。

そしていよいよ順番がまわってきた。

「次の人どうぞ」

係員がのんきに二人に声をかける。

「えつと二人で」

「いいえ！！22名です！」

正志の台詞を抑えて後ろのサッカー部員の一人がそう叫んだ。するとその瞬間、茜のローキックが叫んだ男に直撃した。

「ゴゲフ！」

鼻血を出しながら吹っ飛ぶサッカー部員、

「ごめんなさい、どうやらこのバカ私達を呼んだと勘違いしたみたい、そこのお二人さんは気にしないでください」

ナイスな茜のフォーローで二人は無事仲良く乗る事ができた。

オッケー！FCサッカー部の撃退成功よ！

「ご苦労様、引き続きがんばってください」

麗治が茜の報告を聞いて通信機を切る。

「ふむ、麗治の姉が動いたぞ」

はじめが声をかける、行き先はお化け屋敷らしい。

「お化け屋敷か、邪魔し放題だな」

陽介が困ったように頭をかく。

「困ってる場合かよ、姉さんはもう入ったんだな？」

「バスケ部なら先回りして職員用の入り口から行っただぞ」

「え！？それってやばくないですか？」

「成程、脅かす時に何かするみたいだな」

麗治達も急いでお化け屋敷へ入っていく。

井戸

「部長、本当に大丈夫ですか？こんな事して？」

「バカ野郎！沖田を盗られても良いのか？ここで男を見せる！いいか？あの伊佐多いさだが沖田と一緒に来たらこの皿を伊佐多にぶつけて気絶させる！その時絶対に沖田には伊佐多がビビって気絶したと思わせるよ！いいな！」

職員を気絶させてお化け屋敷に乗っ取ったバスケ部、既に犯罪の領域ではあるが取りあえず気にしない事にする。

井戸で脅かす役のバスケット部員が身をかがめる。

妙なやる気を出すバスケ部員、

「うー、うー」

麗治の姉がその部員を見ながら言った。

「……ふん、小松田君もデートの邪魔しに来たんだ」

「ええ？どんな事情？」

「……い、言うしかない、ここで好きなんですって告白するしか

ない！僕は沖田さんに一目惚れしてバスケット部に入っただ！ここで自分の思いを告げないときつと後悔する！よし、言うぞ！」

「そこにもいたかお邪魔虫いいいいいいいい！！！」

「ゴハツ！！」

小松田、人生で一番大きな決断をしたのに、あっさり失敗した。

「ちよつと、陽介さんやりすぎじゃないですか？」

はじめのよくわからない台詞は置いて、結局お化け屋敷に転覆

「意外とお邪魔虫もしつこいね。」

陽介が気絶しているバスケット部員を外へ運びながら言った。

「やはり男たるもの潔いさぎよくなくてわな」

はじめがそう言っていると、バスケット部員の一人が気が付いた。

「く、貴様ら、恋をしていないからそんな事が言えるのだ！」

「残念だけど恋人ならいるよ、君達こそ彼女ができないからこんな無様な行動に出るんだろ？」

陽介の惨過ぎる正論に意気消沈するバスケット部員。

「とにかく、邪魔はして欲しくないから、サッカー部員と一緒に隔離させてもらおうよ」

陽介がそう言うと、バスケット部員たちを移動させ始めた。

遊園地の人気のないアトラクションの裏路地

「じゃ、FCの軍勢はこれで全員だな？」

麗治が縄で手足を縛られたサッカー部員とバスケット部員を見ながら言った。

「ええ、これで安心してデートができるわね」

茜のその台詞に部員たちが声を上げる。

「くそおおお！！放せ！」

「悪魔！鬼！人でなし！」

「自分達はどうなんですか？」

悠里が呆れながら言った。

「じゃ、長居は無用だし、僕らも遊園地を堪能しようではないか！」

「おお、良い案だ、我は賛成なり」

「やった〜！遊ぼう遊ぼう！」

陽介の提案にあっさり乗るメンバーたち。

「じゃ、閉館時間になれば係員の人に伝えとくから、バカの集団がいるって」

茜のサディスティックな言動に涙まで流す部員たち。

「許さんからなああああ！！！」

だがその怒号も虚しく麗治たちは行ってしまった。

「・・・部長」

「なんだ・・・」

サッカー部員の一人が口を開いた。

「俺・・・悔しいです！好きな人も振り向かせれなくて！あんなやつに取られて！」

「そうか、俺も悔しい・・・だが、どうする事もできん」

「サッカー部、あんたらも愛する者の為に今日は試合をすっばかしてまできたのか？」

「ふ、そうさ、大事な県大会に通じる試合だが、捨ててやったさ、バカだな俺も・・・」

「そうか、本当にバカだな・・・お前も、俺も」

「ああ！みんなバカなのさ！・・・だから！ここで諦める訳にはいかねええ！」

「そうだ！今こそ団結すべき時だ！」

「・・・ふ、まさか、犬猿の仲と言われたこのサッカー部とバスケット部が手を組むとはな」

「人生、何があるかわからないって事だな、サッカー部部长さんよう」

「よっしゃあああ！！行くぞお前ら！男を見せるぞおお！！」
今ここで、男が魂を燃やし始めた。

ゴールポスト

「勝負よ麗治！どちらが先にゴールできるか！」

「いいだろう、負けたって泣くなよ！」
メリーゴーランド

「どうだい麗佳？お姫様抱っこして馬に乗るこのシチュエーションは」

「な、なんだか恥ずかしい」

「ふふ、かわいいやつだな」

一人でご満悦の陽介だが、傍から見れば一人の高校生がメリーゴーランドに乗って独り言をしているのではっきり言って不気味だ。

コーヒークップ

「よっしゃあああ！！まわすぜオラアア！！」

「ちょ！待って下さいはじめさん！加減しないと僕酔っちゃいます！」

口調まで戻ってしまうほどはしゃぐはじめ、どうやら遊園地は初めてようだ。

アイスクリームの売店

「おいしい？こころちゃん」

「うん！とっても美味しい！」

こころを憑依させてアイスを食べさせる花鈴、

それぞれが思い思いに遊ぶ中、恋に燃える男たちの復讐劇が始まる
とは、

このとき誰も知らなかったのである・・・。

第22話「デート護衛後編」

「ねえ正志！今度はあっち行こうよ！」

「いいよ美由」

サッカー部のアイドルことマネージャーの美由とラブラブの正志、だが、既に魔の手はすぐ後ろに潜んでいた。

今のところサッカー部員は見当たらないし、もう大丈夫だろ少し気の緩んでいた正志に、誰かが肩を掴んできた。

「えっ？」

美由が正志の気配が消えたことに気づき振り返る。

だが、人の多い遊園地だ、すでに正志の姿は見えなかった。

「優くんあ〜ん」

「沖田・・・恥ずかしいよ」

「だ〜から〜、私のことは笑^{えみ}已^みって呼んでよ〜」

沖田の姉が伊佐多にべったりでパフェを食べている。

傍から見れば美少女美男子の眩しいカップルに見える。

「そうだ、ジューズ買って来るね！」

「いい・・・俺が行く」

有無を言わず伊佐多が席を立て買いに行った。

「早くしてね〜」

笑顔を絶やさない沖田の姉、だが、伊佐多が行ってしまうと、なぜか無表情になる。

まあそれ程伊佐多に惚れているのだろう。

だが、いくら経っても、伊佐多は帰ってこなかった。

PCへキューピットクラブがそれに気づいたのは美由からの電話だった。

『正志が！正志が消えちゃったよ』

「はい？」

茜の携帯にかかって来たので茜が出る。

『普通に歩いてたら、グスツ、いきなり消えて、ヒック』

「・・・はぐれた・・・ってわけじゃなさそうね」

とりあえず美由を落ち着かせて電話を切る。

「麗治、ヤバイ事になったわ」

「奇遇だな、今さっきオレの姉貴からも電話が来た」

「そっちも？・・・とにかく、探すしかないわね」

「そうだな、他のみんなに電話して伝えてくれ、バカFCを潰すつてな」

そう言つて二人は行動に出た。

「ふむ、わかり申した、すぐに搜索する」

携帯を切るはじめ、後ろでは悠里が疲れた顔をしている。

「悠里！敵の反逆だ！FCを探すぞ！」

「え！？わかりました！僕はこっちに行きます！」

「うむ！でわ我こちらを探す！」

「まったく、諦めが悪く汚い根性の奴らの所為でデートが台無しだよ」
「ようくん、デートならいつでもできるでしょ？今はFC探そうよ、ね？」

「もちろんさ麗佳！君のためなら何でもするよ！」
目の色を変えて走り出す陽介、現金な奴だ。

「どうですか？いますかこころちゃん？」

「だめ、上からだと人が多すぎて見分けがつかないです！」
花鈴とこころも必死に探す、なかなか見つからなかった。

時は過ぎる、夕陽も落ち始めて周りはオレンジ色に染まり始めた。
今だ麗治たちはFCを見つけれなかった。

「くそ！どこにいるんだやつらは！」

麗治が走りつかれて息を切らす、

ふと前を見ると、向こうのオープンカフェのテーブルに、姉がいた。

「・・・姉貴」

そう呟く麗治、よく見ると、

姉は泣いている様だった。

それもそうだろう、折角のデートに、こんな虚しい時間があつては・
。。

「・・・FC、絶対ゆるさねえ」

そう言った麗治はまた走り始めた。

「あ・・・美由ちゃん」

走っていた花鈴がベンチに一人で座っている美由を見つけた。

「み・・・美由・・・ちゃん・・・」

花鈴は声をかけようとしたが、それを抑えた。

美由が泣いていたからだ。

「・・・花鈴ちゃん、早く見つけよう」

「・・・ええ・・・もう少し待っていてください、美由ちゃん」

走り出す花鈴、こころもついてきた。

麗治がある場所で止まった、
すると、他の全員も走ってきた。

「・・・どうやら、残る場所はここだけみたいだな」
麗治がやっと見つけたという顔をした。

「奇遇だな、みなが一同を介するとは」
はじめが笑って言う。

「そうですね、それよりも、早くFCの奴らに文句を言ってやりたいよ」

悠里が不敵な笑みを浮かべていった。

「文句だけじゃ足りないわよ、情報を提供してもらわなきゃ」
続けて茜は邪悪な笑みを浮かべた。

「その後はオレの呪術で呪いでもかけようかな？」
陽介が冗談とも本気ともとれる顔で言う。

「・・・私も、今回だけは、本当に怒れます」
麗佳が目をきつくして言った。

「私も、本気モードで怒らせてもらいますわ！」
珍しくキレてる花鈴。

「さあ！みんないこ！」
最後にこころが勢いよく遊園地のシンボル、『城』に入って行った。

遊園地のシンボルであり、目玉施設でもあるこの『城』

その中の『王室の間』へただの休憩所々に、FCと二人がいた。

「よし！この様子だと、美由ちゃんは帰ったぞきつと！」

「ああ、そして途中で消えた正志を嫌いになる、完璧じゃないか！」

「良かったですね部長！これで美由ちゃんは元に戻ってくれますね！」

サッカー部が笑いながらそう話していた。

「サッカー部も上手くいつているようだ、我々も順調だな？」

「もちろん！こんなに時間が経ちましたし、沖田さんもあきらめて帰りましたよきつと」

「うんうん、そもそもこんな無口な男に惚れてしまったのが良くないんだ、でもこれで、沖田さんも目が覚めるだろう！」

勝手に自分の都合よく解釈していい気になるバカFCたち、

まさかこの後、怒りの鉄槌を喰らうとは、思ってもいなかっただろう。

「にしても、キューピットクラブまで負かしたのは驚きだな！」

「ああ、天才の沖田に情報屋茜、謎陰陽師はじめに西条姉弟、しかも最近呪術師陽介まで入ったって聞いたからな、計画のほとんどを潰したのはさすがだが、やはり最後は藍が勝つのだよ！！」

「いよ！部長！かっこいい！」

「吐き気のするセリフにかっこいいなどという賞賛はあわないだろう？」

ふざける一同の前に、六人の影が見えた。

「な、まさか・・・」

「キューピットクラブを馬鹿にするのは聞き捨てならないわね」

「さうで、腐ったそなた達の性根、完璧に潰して差し上げよう」

「人に迷惑散々かけて、笑っていられるのも今のうちですよ？」

「今回、私^{わたくし}本当にムカついておりますので」

「さて、そろそろ死刑執行時だな、バカFC共」

陽介と茜とはじめと悠里と花鈴と麗治が黒い顔で脅し文句を言う。

「ま、まて！、お前らなんでそこまでして俺らの邪魔をする！？」

「そうだそうだ！人の恋は自由なんだぞ！！」

「あなた方のその自由の所為で！！美由さんは泣いたんですよ！！」

「こころが叫んだ。」

「あなた方は自由をわかっているんですか？少なくとも！今のあなた方の言っている自由はただのわがままです！！」

「・・・・・・・・・・」

「好きだ好きだの一方的で！しかも、大切な人を泣かせてまでして！それなのにあなた方は平気で笑っていられるんですね！！最低です！！！」

「・・・・・・・・・・」

「いま！！あなた方に恋をする資格なんてありません！！周りを考えてください！！！」

衝撃を受けているサッカー部、だがバスケット部は少し気まづいだけの
感じだ。

「おい、バスケット部、貴様らも同罪だってわかっているよな？」

麗治がバスケット部を睨みながら言う。

「え？・・・まさか沖田さんも泣いてい

「黙れ」

麗治が喋っていたバスケット部員の首元を掴みながら言った。

「お前らに、姉貴の気持ちがわかるか？」

そのセリフは、バスケット部に強い衝撃を与えた。

すぐに正志と伊佐多は開放された。

ロープで縛られていたようだ。

「すぐに行つてあげてください」

悠里のセリフに、二人は頷いて走り去った。

「さて、死刑の続きといきますか」

陽介がそう言うと、六人の影の目が光った。

「美由！！」

ベンチで座っている美由を見つけた正志はすぐにかげよった。

「た、正志！」

泣いていた美由は、すぐに笑顔になって正志に抱きついた。

正志は気づく、美由の体温が冷たい事に、

「・・・ずっと、待っててくれたのか？」

「・・・当たり前でしょ！」

そう言う美由に、そつと上着を着せる正志、

「ごめんな、今度のデートは、寂しい思いさせないから」

正志がそう言つと、美由は笑顔になった。

「・・・ごめん」

伊佐多が息を切らしながら、麗治の姉の元につく。

「・・・遅いよ」

無表情だった、やはり怒らせたか。

「・・・ごめん」

「・・・もういいよ」

「・・・ごめん」

「・・・うん、わかったから」

「・・・ごめん」

「ああもう！それ以上言わないで！」

麗治の姉は目を潤ませながら伊佐多に言つた。

「・・・ありがとう」

伊佐多は笑已に抱きついてそう言つた。

「・・・なによ、心配したんだから」

「・・・そつか・・・今度埋め合わせする」

そう言う二人の上の空に、花火が上がる。

『当遊園地の夜の花火ショー！夜空に舞う花火をどうぞご覧ください！』

「・・・部長、花火、きれいですね」

「ああ・・・そうだな」

「サッカー部部长、お前も酷くやられたな」

「お前もな、バスケ部部长」

ボロボロのFCメンバー、しかも今日限りでFCは解散しろの命令が下った。

「・・・人を愛するって、難しいな、バスケ部部长」

「そうだな・・・それでも、愛するのを止めないのが人間だよな」

夜空に舞う花火は、それぞれに元気を与えてくれたようだ。

「きれいだな、美由」

「うん」

「・・・きれいだね・・・笑已」

「・・・そうだね」

「ほらご覧麗佳、花火が僕らを祝福してくれてるよ」

「お主頭が変になったのではないのか？」

「ちよ、言いすぎですよはじめさん」

「いいですよ悠里君、本当のことですし」

「れ、麗佳ちゃん？本音でた？」

「わーい、花火きれいー」

「・・・どう？・・・お姉さんの敵討ちできた？」

茜がイタズラな笑みで麗治に聞く。

「うん、まあ、お前らも手伝ってくれたしな」

「そつか・・・わゝ、本当きれい」

「・・・ありがとな」

「・・・え？今何か言った？」

麗治の声は小さすぎて、茜には聞こえなかったようだ。

・・・ま、いいか

「なんでもねえよ」

「そう・・・素直じゃないわねえ」

茜のその言葉は、花火の音にかき消されて、本当に聞こえなかった。

第23話「ブラコン妹×地味男」

「ブラコン妹と地味男！」

「……ヤバイ世界に入っていないか？」

「如月^{きづらぎ}さな、帰宅部一年、極度のブラコンで兄を愛している、^{わか}和夏史^{しあつ}乙^{おつ}囲碁部一年、いたって普通の平凡青年、以上」

「とりあえず、今回はあきらめないか？」

麗治の説明の後、陽介が間髪を入れずにそう言った。

まあ、気持ちはわからなくもないが……。

「如月兄妹といえはこの学校の名所の一つ、『ブラコンの如月』ではないか、名所を消すのは我としてはいけ好かん」
はじめが要するにめんどくさいと言った。

「如月あき、今や人気モデル雑誌にも載っている程の完璧な容姿に加え、その振る舞いは周りの人を幸せにするとまで言われるアイドルモデルですね、そして、その妹さな、兄譲りの完璧な容姿、尚且つ明るい性格が男女とわず人気がありますが……究極の兄好きで、独占欲が強く、周りの目を気にしない堂々振りで、この二人はいつも一緒に仲の良い理由から、『ブラコンの如月』といわれこの高校の名物なのは、間違いないですね」

悠里が麗治にも劣らない完璧な説明をしてくれた。

「そ、そんなにすごい人なんですか？」

「こころが控えめに聞くと、

「すごいとかそんなレベルじゃない、あきとは同じクラスで面識があるから言っが、あの兄妹は異常だ、特に妹がな、顔は良いしいつ

もの性格は申し分ないんだが、兄の事となると、人を殺しかねない」
陽介のセリフに、全員がげんなりした。

「どうでしょう？そんな二人を離すなんて・・・無理ですわ」

「この依頼はさすがに不可能ですし、あきらめてはどうです？」

「ごめん、無理」

茜が麗佳の提案をあつさり切り捨てた。

「いやさあ、私も初めは無理だと思ったんだけど、如月兄からも依頼されてね」

金か・・・

麗治は静かにそう心で呟いた。

「とりあえずさ、まずはあきと話して妹があきから離れる方法を考えよう」

陽介の提案に、メンバーは賛成してあきの教室へ向かった。

あきの教室

教室の前まで来たメンバー、だが、教室の中を見て全員がその場にずっこけた。

「しまった、さなの存在を忘れていた」

そう呟く麗治の目線の先には、容姿の整った美形な兄と妹、如月兄妹の姿があった。

「ああ、キューピットクラブの皆さん、はじめましてあきです」

こいつはどこかネジでも抜けているのだろうか、そう思ってしまう程マイペースな兄、

そして先程から不審な目で睨んでくる妹、

絶対無理、今回の依頼は桁違いだ

既に負け気の麗治だった。

とりあえず、ここでさなに兄離れさせる計画を知られると後々ま

ずい、ここは適当にごまかして史乙に会いに行くべきだな

「早速だが、さなちゃん、君はお兄さんと別れるべきだよ」

麗治の作戦を見事に踏みにじる陽介、

しかもさなの不審の目が今度は殺意の目になったのを感じる一同。

「私と・・・お兄ちゃんを・・・生き別れにさせるつもり？」

誰もそこまで言っていないとツツコムが、それは心の中でだ。

「俺はそんな事言っていないよ、ただね、人として生きるなら今の生活態度を」

「ドスッ」

陽介の顔の横に、アイスピックが通り過ぎる、アイスピック、氷を砕くために使うデカイ針

「次は、外さない」

目が本気なので陽介は白目を向きながらはいと返事をした。

「・・・あなた達も、敵？」

今度は麗治達を見て言うさな。

「いえ、ちがいます」

「我は無関係なり」

「僕も無関係です」

「わ、私も何も異論がございませんわ」

麗治とはじめと悠里と花鈴は即座にそう言った。

「なめるなよクソガキ」

一人威勢の良い茜、

新たなアイスピックが突き刺さる前に一同は教室から俊足で逃げた。

「お前はバカか！」

「だってあのガキ生意気だから」

「同年だろ！！」

麗治と茜はまだ口喧嘩をしている、

その間に、悠里は史乙を呼んでいた。

「単刀直入に聞くけど、あのさなを外見で好きになったって言うならあきらめなさい、それが一番」
茜がばつさりと吐き捨てる。

「待ってくださいよ！僕は彼女を外見で好きになったわけじゃないし！あの表向きの性格が好きなわけでもない！」

史乙は真剣な顔で言った。

「僕は、彼女の本当の姿を知っているんです」

「なんだ？妖怪だったのか？」

いまだにいじけている陽介がバカにしながら言う。

「・・・違いますよ、彼女が・・・兄を好きな理由は・・・」

そう言つて、黙り込む史乙、

「なんだろう？」

はじめが聞くと、史乙は、はっと気づいた表情になって慌て始める。

「な、何でもありません、そうですか、僕にはやはり無理な恋愛ですか、あきらめます」

そう言つて去ろうとする史乙、

「おい、男なら、その台詞に一言はないな？」

はじめが脅しの口調で言う、そして史乙は立ち止まる。

「どんなわけがあるかは知りえてない、が、きさまが本当にあきらめたのなら、もう如月には手を出さないという事だぞ?」

はじめの言葉は、不思議と心の中に入ってくる、そして、史乙も振り返った。

「・・・生き別れていたんですよ、さなはあきさんと」

ゆっくり語る史乙、話はさなが生まれた頃の事だ、

まだ幼かった二人、その二人に不幸が降り掛かる、

両親の突然の他界、幼い兄と妹は別々に孤児院で育てられた。

転機が訪れたのは、中学生の時、

兄であるあきが雑誌モデルを始めて売れ出した頃だ、

あきは生き別れの妹、さなを見つけて、今は二人で生活をしている。

「いわば、さなにとって唯一の肉親であり、自分を助けてくれたのはあきさん・・・好きになって当然じゃないですか、二人には兄妹として過ごした幼い思い出がないんですから・・・」

寂しく言う史乙、そして、麗治たちも神秘的な面持ちになった。

「・・・多分、この話を知っているのは、さなとあきさんに、ここにいる皆さんだけです、もちろんですが、この事は誰にも言わないでください」

さすがに、これほど痛い話をされれば、他人に気軽に話そうなどと思えない、

茜だって困惑の表情をしている。

「・・・では、この話は忘れていただいて結構です、それと、二人をやはり離れさせるなんて無理ですね、この依頼、取り消します」

「さて」

麗治が史乙に声をかける。

「・・・なんですか？」

「・・・お前がどこでその情報を聞いたのか、そんなことはどうでもいい、なぜお前はこの依頼を頼んだ、そこがまだ不透明だ」

「・・・そんなの決まっているでしょ、好きだからですよ」

史乙が、悲しい顔をして言った。

「・・・中学の頃から、さなとは知り合いました」

さなは、中学の頃は今の明るい性格とは正反対で、誰にも喋りかけない暗い奴だったんです。

そんな彼女は、いつもいじめの標的にされていた。

そんな彼女と僕は、学級委員という仕事の関係でした。

黙々と仕事をこなす彼女は、周りからは不気味と噂されたけど僕には、寂しさが嫌というほど伝わってきたんです。

そんなさなと、親しくなってきたきっかけは、彼女の暴行事件のときだった。

さなが大切にしていた母の形見であるペンダントを、男子生徒がわざと踏みつけて壊した。

さなは泣きながら狂ったように男子生徒を殴った。

本当に怒っていたのだろう、男子生徒は顔に大きなあざと歯が二本折れた。

その日から、元々あったさなと周りの壁は更に高くなった。

そんな中、僕はなぜか話しかけた。

『スツキリした?』

たしか、初めてかけた言葉はそれだった。

『・・・全然』

それが彼女の答えだった。

『ペンダント見して』

『やだ』

『僕なら直せるかも』

『やだ』

『大丈夫だよ、僕は』

『やだ』

『・・・・・・』

『・・・・・・』

なんだか、その会話が楽しく思えた、

それから、僕は毎日のように話しかけた。

『おはよう』

『話しかけるな』

『弁当一緒に食べようよ』

『あっちいけ』

『僕とペア組まない?』

『一人で良い』

全部彼女は否定しているのに、
なぜかその言葉に悪意は感じられず、
なぜかそんなやり取りが、面白く感じられた。

そんな彼女が変わったのは・・・あきさん・・・兄が登場してからだ。

『おはよう!』

今日も、てつきり皮肉が返されると思っていた。

『・・・うん、おはよう!』

につこりと、見た事もない笑顔で返された。

でも、それは楽しいやり取りではなかった。

彼女は、変わってしまった。

「はじめは、動揺程度でしたけど、お兄さんが戻ってきたわけですし、きつと幸せになった、そう思っていました、でも、明らかに無理しているんです」

つらそうな表情で言う史乙、

「彼女は・・・無理に、演じているだけなんです、今の、この幸せ

を壊したくないから・・・」

麗治たちも、それにはただ、黙っているしかなかった。

第23話「ブラコン妹×地味男」(後書き)

結構重いな・・・by陽介

第24話「ブラコン妹×地味男続」

史乙は帰っていった。

だが、麗治たちはまだ屋上にいた。

「・・・あきくんも、さなちゃんが無理しているのを知ってて、離れようとしたのですね」

花鈴は静かにそう言う。

オレンジ色の夕陽はもうすぐ沈みそうだ。

誰も、何も言わず、ゆっくりと帰る事にした。

帰り道

「あゝ！危険人物！」

陽介はその言葉にドキツとして、振り返る。

予想通り、後ろには、如月さながいた。

「や、やあ、どうも」

「・・・ふん」

アイスピックを投げつけられ、その上にあんな話を聞いたのだ。

正直さなとはもう会いたくないと思っていた陽介、

だがさなはそんな事はもちろん知らずジロジロと陽介を見る。

「あ、あの〜？」

「ねえねえ！呪術家って本当なの？」

「・・・はい？」

その口から出た言葉は、本当にたわいもない言葉だった。

・・・普通の子・・・だね、ようくん

・・・本当、昨日の話が嘘かもって思っちゃっませ

麗佳と陽介の気持ちも知らず、さなはかわいい笑顔で話をする。

その内容は、兄の自慢や兄の好きなもの、兄の最近はまっている番組など、

確かに兄の事を好きでいる様だ、

だが、やはり無理にしている感じもした。

その笑顔は作り物で、なぜか怯えているように見えた。

「じゃ！今度私とお兄ちゃんの仲を裂こうなんて思ったら、またア
イスピックだからね！」

「・・・ああ」

陽介もわかってしまった。

彼女が、この幸せが壊れてしまいかもしれないと、怯えている事に。

「ねえ、あの制服って、東豪高校とうこうこうのだよね？」

「ええ！あの不良が多い高校の？」

はじめが女子生徒の会話を聞いて窓の外を見る。

たしかに、校門の前には頭を金に染めたガラの悪い不良が三人いた。

「・・・全く、何もしなければよいのだが・・・」

はじめは無理に戦う気はなかった、

今この『はじめ』では、怖がられることはない、

だが喧嘩師だった頃は、大の大人にさえ怯えられていた。

毎日のように来る不良を意味もなく殴り倒し、警察に追いかけられ
た時もあった。

そんな自分に、気軽に話しかけてくれる女性などいなかった。

・・・いや、一人だけいたな・・・

だが、もう昔の事だ。

今はこんなにも楽しい、仲間に隠し事があるのは退けるが仕方ない、
でも、麗治だけは、今でも友達でいてくれる。

「・・・まあ、いいか」

暗い事を考えると、変な自分が現れる。

本当の自分ではなく、見た目だけに気をとられた自分が・・・。
頭をかきながらはじめは廊下を歩いて過ぎた。

さなは驚愕した、兄と一緒にいつもの登校、だが、
あの門の前にいるのは・・・二度と会いたくなかった相手、

ペンダントを踏み潰したあの男子生徒だった。

無視して学校に入ろう

そう思っただけで早足で校門をくぐろうとするさな、
だが、そんなに上手く行くはずもなかった。

「さてよ」

肩をつかまれる。

振り返ると、あの男子生徒が笑ってこっちを見ている。

「な、なんのようですか？」

「オレだよオレ、大木だよ、忘れたのか？」

なぜ今更・・・そんな事を言う？

「・・・なんのようですか？」

睨みつけながら言うさな、だが相手はなんとも思っていないようだ。

「おいおい、中学校の同級生を忘れたのか？薄情な奴だな」

「だから！あなたなんて知りませんし！用がないなら放して下さい
！」

「うるせえよ」

さなの肩を掴む手に、力が入る。

「俺と一緒に来いよ、遊んでやるぜ？」

「いい加減にしてくれないか？」

あきが不良の手をさなから振り払う、

「僕の妹に手を出さないでくれ」

はつきりというあき、だが、それが不良たちを怒らせてしまったようだ。

あれ？なんだか今日は騒がしいですね麗治さん

ああ、確かにそうだな

こころと麗治が登校してきた、校門の前で何か騒いでいる。

・・・！！！！大変です！

？、どうした？

昨日会ったあきさんが！殴られてる！

「なに！？」

麗治が走り出す、そして、二人組みに殴られているあきと、泣き叫んでやめると言っているさな、だが後ろからもう一人の不良に両腕を抑えられている。

「やめて！！やめてよー！！」

暴れ方が尋常じゃない、だが手を振り払う事はできなかった。その間にもあきは殴られ蹴られている。

「よえ、こいつ弱すぎてビックリだぜ」

「モデルだからっていい気になんなよバカが！」

ひどい暴行、だが、誰も止めない、走って素通りする生徒達、だが、麗治は止まった。

そして、更に後ろから誰かが走ってくる。

「いい加減にしろこのド低脳どもがああああ……！」

麗治が不良の一人に渾身の拳を腹に叩き込む、

そして、大木とかいう不良を、史乙が飛び蹴りで吹っ飛ばした。

「なっ!？」

さなを抑えていた不良が驚く、

「無抵抗の奴に二人掛りとは卑怯を通り過ぎて人間のクズとしか言いようがないな……！」

「さなを泣かしやがって！お前らには地獄がお似合いだ！今すぐにも送ってやろうか？」

麗治と史乙が脅し口調で言う、

先程攻撃した奴らはどうやら気絶しているようだ、

一人になった不良は青い顔になってすぐに二人を立てさせて逃げた。

「お兄ちゃん……！」

さなは開放されると、すぐに開きに寄りかかった。

「お兄ちゃん！大丈夫！？お兄ちゃん……！」

「うん、大丈夫」

意外とケロツとしているあき、だが、さなの涙は止まらなかった。

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！本当ごめんなさい……！」

息が続く限り、そう言っていた、言つたびに、涙はとめどなく流れ

る。

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんな」

「もういいよ、大丈夫だって」

頭をなでるあき、それを見ていた史乙は満足した笑みで去ろうとする。

「いいのか？」

麗治が聞く、

「・・・いいですよ、これで」

史乙は先に行く、

それを、さなが振り返ろうとした、

だが、さなは振り返らず、堪えて、兄に抱きつく。

「・・・さな、大丈夫だよ」

「・・・うん、よかった」

「・・・さな、僕は、お兄ちゃんはずっとそばにいるから」

「・・・うん」

「だから・・・」

「・・・彼を、追いかけなよ、お兄ちゃんは、さなの側を絶対に離れないから」

「・・・お兄ちゃんがいれば、それでいい」

「僕はよくないな・・・さなが素直になってくれないから」

あきはそう言つてさなを突き放す。

「さなは、さなで幸せを掴みなよ、僕はいつも、さなの側にいるから、ね？」

「……でも」

「追いかけた方が良いでしょう」
「こころが言つた。」

「素直になつたほうが良いですよ、今のままでは、お兄さんにも心配かけているし、自分の好きな人だつて心配させちゃう、強く生きる事は良いことですけど、力み過ぎて周りが心配してますよ？」

「周りを見てください、あなたはもう、一人じゃないんですよ」

「……仕方ないなあ」

今までの、演じていたさながふと消えた。
もう、彼女は怯え続ける事はない、素直になつた。

「……はあ」

史乙は落胆していた。

「……何を落ち込んでるんだオレは、これで良いはずだろ、これでいいんだ、無理に追いかけるはしない！……それがいいんだ」

「……史乙」

「はい？なんですか？ちょっと今忙しすぎて困っているので話しかけないでください」

「……やだ」

ふと、史乙が固まる。

驚いて振り返ると、さながいた。

「……何で追いかけたんだ？」

「うるさい」

「……お兄さんはどうしたの？」

「偉そうに質問するな」

「……いきなりどうしたの？」

「この鈍感バカ」

なぜだろう、やっぱり楽しい、その理由を史乙は長らく忘れていた。なにせどんな時も演じているさなだったのだ、だが、今は違う。

「……素直になったね」

「……そうだよ、バーカ」

口では確かに皮肉を言っている、でも、さなは笑っている。

変だと思っている、でも、さなはあまのじやくなのだ。

「……好きだよ」

「・・・・あつそ」

「・・・・付き合ってくれる?」

「・・・・どうしようかな?」

「・・・・」

「・・・・」

笑った、いつ以来だろう、二人でこうやって笑うのは?

「ありがとうね、麗治くん」

「どういたしまして」

立ち上がったあきは麗治にお礼を言った。

「・・・・わざと、手を抜いてましたね?」

麗治がピンピンしているあきを見て言う。

「さすが、天才の沖田、鋭いね」

「そうですか、まあ、あなたのように優しい兄を、僕は知ってますからね」

バックを背負う麗治、

青空の下、今日はどうやらすがすがしい一日が送れそうだ。

第24話「ブラコン妹×地味男続」(後書き)

感想評価待ってます、ぜひお願いします！by作者

第25話「クール系×けなげ少女前編」(前書き)

さあ、どんどん更新！

第25話「クール系×けなげ少女前編」

「アズ~~~~イイイイ!!」

陽介が屋上でだれている。

「うるさいぞ、暑いのは皆同じ、忍耐が足りんな」

はじめはソフトクリームを食べながら日陰で寝転んでいる。

「アイス食つといて忍耐がないなどよく言えるな？俺は一樣先輩だぞ？アイスぐらい買ってきてくれてもいいんじゃないか？」

「それなら悠里に頼め、あ奴なら喜んで買いに行く」

「別にも買ってもいいですけど絶対喜びませんよ！全く、何を言うんですかはじめさんは」

悠里が呆れたように言葉を返す。

「・・・そろそろ、依頼がきますわね」

花鈴が扇子を仰ぎながら言うつと、麗治と茜とこころと麗佳がドアから出てきた。

「今回は！クールガイとがんばり屋さん!!」

・・・やっぱり伝わりにくいって、その称名。

「和田^{わだ}要^{かなめ}、ハンド部2年、同級生からの印象は「クール」「冷たい」

「冷血漢」など、新井^{あらいたま}珠、バトミントン部1年、同級生からの印象は「がんばり屋さん」「けなげ」「親友」など、まあそんな所だ」

麗治が簡潔に説明する。

「ちなみに相談者は珠！恋人である要との破局を止めて欲しいんだつて」

茜がサラッと大事な部分を説明した。

「ちょ！破局寸前なんですか!？」

悠里が困った顔で言う。

「ふん、一度終わりと思っただことん終わるものだ、さっさと別れた方がいいぞ」

陽介がひどい台詞を吐く。

「そんな・・・よう君、ひどいよ」

麗佳がボソツと言う。

「ふ、冗談だよ、さ、その破局寸前の二人に会いに行こうじゃないか」

陽介がころつと態度を変えて屋上を出ようとした。

「まてまて、相談者とは話をして昼放課に落ち合う事になっている、それまで待て」

麗治が陽介の頭を掴みながら言った。

「とことんここにいる人達は先輩をなんだと思っているのか疑問で仕方ないよ」

ぶつぶつと文句を言う陽介だった。

昼放課

校庭の木陰に相談者の珠と恋人の要がいた。

「やつぽー、一緒に食べにきたよ」

「あ！待ってたよ、こっちこっち！」

茜が声をかけると、ショートカットのかわいい笑顔の相談者が手を振って答えた。

「要先輩、私の友達の茜ちゃんです」

珠が要に茜達を紹介する、

「・・・俺、うるさいの嫌いなんだよね」

鋭い眼つきで茜達を一睨みする要、

クールと言つべきか、性格が悪いと言つべきか、

「・・・」、「ごめんなさい、でも！弁当はみんなで食べた方が
良いし！」

笑顔を絶やさず話しかける珠、要はフーンと言ってそっぽを向いた。

《感じわるっ！！》

《ありや相当性格悪いな・・・》

《・・・ム力つくな、喧嘩師の俺だったらケンカを吹っかける所
だ》

《なんで珠さんはあんな男好きになつたんだ？ありやDVの可能性
があるのに》

「・・・チッ」

《あれ？・・・今花鈴の方から舌打ちが聞こえたような？》
それぞれが要に悪意を感じながら弁当を食べ始める一同。

「・・・」

だれも喋らない・・・。

麗治さん、なんでだれも喋らないんですか？

するか、俺に聞くな！

こころが心配しながらそこら辺を浮遊する。

そして要の前で止まってみる。

「・・・うせろ」

麗治ははつきりと見た、要がこころを睨んで罵声を浴びせたシーンを。

れ、麗治さん、あの目つきの悪い人がうせろって・・・うう
泣きながら寄ってくるこころ、

いや、お前その前に見えてることに驚けよ！！

結局、その日の昼食は気まずく暗い空気のまま終わった。

屋上

「なんだあの最低な男は！！」

陽介が叫ぶ、よほどムカついたのか、暑さすら忘れている様だ。

「あんな男と別れたくないのかお前？」

麗治と一緒に来てた珠に聞いた。

「はい、だって！・・・私は、先輩が好きだから・・・」

顔を赤くしながら言う珠、

「全く、どんな神経してるんだよお前」

陽介が苛立ちに耐えれず声を荒げる。

「ちよっと、珠に怒ってどうすんのよ」

茜が陽介を抑えようとして言う、

だが陽介は構わず言った。

「大体、本当にお前ら付き合ってるのか？カップル同士があんな空気で弁当食う事自体おかしいっつの、案外あのムカつく男だって実はもうあんにうんざりしてるんじゃないのか？」

「陽介先輩！言いすぎですよ！」

悠里がそう言ったが、既に遅かった。

「・・・そっか・・・そうですね」

珠が顔を下に向けて呟いた。

「気にするな、悪いのはそなたではないぞ」

「いいえ、やっぱり、私が悪いんですよ、先輩に告白した時だって、受けてくれたけど、嫌そうだったし、一緒にいるとき、一回も笑ってくれなかったし、なんだか私に冷たいし・・・私、最低だ、嫌われている事、知らないで、彼女だなんて・・・浮かれちゃって・・・すみませんでした、もういいです、依頼はこれで、終わりにし

ます」

悲しそうな笑顔で、珠は屋上を出て行った。

静かになる屋上、

気まずい空気、

そして、全員が一斉に陽介を睨んだ。

「……すまん、頭がどうかしてた、ぜひとも殴ってくれ」

土下座をする陽介、

「いや、あんたには殴る価値すらない」

「せいぜい今日犯した罪を一生背負う事ね」

「我也殴る相手を選ぶ、お主は殴ると我が拳が汚れるゆえ殴る気がない」

「最低です先輩、とりあえず首吊ってください」

「……かける言葉もないわ」

「うおい！！やっぱひどいな君達！第一俺だって好きで言っただけじゃねえよ！！考えてもみるあの要とか言う彼氏の態度！！明らかにおかしいだろ！！あんな奴と付き合っている珠がかわいそうだとは思わないのか！？」

陽介の反論に、全員がハツと気付いた顔をする。

「……確かに、それはそうかも……」

茜が腕を組んで考える。

「よし！ここは一つ！彼氏さんの気持ちを確かめよう！！」

そう叫んだのはここらだった。

第25話「クール系×けなげ少女前編」(後書き)

感想評価待ってるよ
byころ

第26話「クール系×けなげ少女後編」

「要の気持ちを確かめる・・・か、それは名案だな」

麗治がこころを誉める、珍しく誉められたこころは素直に喜ぶ。

「うん、名案がうかんだ所で、次はどうやって確かめるかな」

陽介がそう言うと、全員が陽介を見る。

「・・・ん？どうした？」

「いや・・・ここはあんたが責任を持って、要に聞きに行くべきだろ」

麗治があつさりと言った。

「え？いや、むりっすよ先輩」

「先輩はお前だ、いいから行け、あんたにとっちゃ要だつて後輩だろ？先輩の風格を見せ付けろ」

「ほ？？簡単に言ってくれるねえ、あの血も涙もないアイスモンスターに立ち向かえと？」

「お願いよう君！やってほしいの、ダメ？」

麗佳の上目遣いでおねだり、甘える声付。

「任せろ、俺に不可能はない」

あつさり態度を変える陽介、ある意味清々しい。

そして、アイスモンスターこと、要に立ち向かうことになった。

下校時間

陽介はハンド部のグラウンドに来る、そして、要を見つける。
要は一年の後輩達に片づけを押し付け、帰ろうとしていた。

「とことんいけ好かない男だな・・・」

そう呟きながら、陽介は要に声をかけ、グランドの隅に来させた。

「何のようですか先輩？」

「な〜に、簡単な事、珠ちゃんの事は好きなのかい？」

「・・・・・・」

ごつつ怖い顔で睨んでくる要、

「・・・・何の用なのかがいまいち分からないんですけど？」

「だ〜か〜ら〜、好きかどうか聞いてるんだっつーの！」

「なんで先輩に言わなきゃいけないんですか？そんな必要ないですよ？」

「ゴツッ！！」

陽介が要の後ろにあつた樹木を殴る、その際に大きな穴が開いた。

「お前は、質問に、答えればいい、わかったか？」

今までにない最悪な笑みで脅す陽介、要はさすがに動揺して首を縦に振った。

「で、好きなのか？」

「・・・・付き合う前から、珠が俺に興味があつたのは知つてて、案の定、告白してきた、正直その時は好きじゃなかった、でも従順な女だったから、利用できるかなって、思つて付き合う事にした・・・・でも、あいつ・・・・」

「ずっと・・・・笑っているんだよ」

「俺がどんなにひどい事言つても、どんなにけなした態度をとつても、あいつ、笑つてて、そんなあいつを見ていると、ふと、笑顔以

外の表情が見たくなつてさ、泣き顔なんて、見たことなく、それで最近は今まで以上に冷たくしてるんだけどさ・・・やっぱ笑つて

恥ずかしそうに語る要を、陽介はずっと見ていた。

「・・・まだはつきりしてないけど、多分俺、アイツの事が好きだ」

「・・・そうか、本当に好きなんだな？」

「・・・多分」

頭を照れ隠しにかいている要、そして、陽介は口を開く。

「お前はもうすぐ、一生後悔する場面に会う」

「・・・は？」

いきなりの言葉に、困惑する要。

「ど、どういうことですか？」

「そのままだ、お前はもうすぐ後悔する、その後悔が、一生残るか、ここで食い止められるかは、おまえ自身に掛かっている」

「・・・」

固まる要を置いて、陽介はグランドを出ようと歩き出した。

「じゃあな、話は以上だ」

そう言つて、陽介は要の前から消えた。

「・・・後悔する・・・場面」

要がまだ一人でその意味を理解しようと考えていると、ふと、気配を感じた。

グランドの隅で座っている要の前に立っているのは、

「・・・珠・・・」

要が少し、緊張してその名を呼ぶ、

「・・・ああ、一緒に帰るのか？・・・じゃ、行くか」

「先輩・・・私、あなたのことが大好きです」

顔をうつむいてる珠、要は嫌な予感が的中しそうな気がして、体が震えた。

「・・・それがどうした」

「・・・だから、私、先輩だけには、嫌われたくないから、これ以上、嫌な女だって、思われたくないから・・・」

「・・・さようなら」

珠が顔を上げて、その言葉を口にした。

二つの瞳には、大粒の涙が、溢れ出して、流れていた。

要が驚いて、困惑する。

すると、珠は勢いよく走り出した。

「お！おい！待てよ！」

立ち上がる要、そして、後悔しないために、珠を追いかけた。

先輩は、私が嫌いなんだ、

これで、よかつたんだよね？・・・これで、私、先輩の迷惑にはならないよね？

これでいいなんて・・・これっぽっちも、思っていない。

ずっと、先輩の隣にいたいと思ってた。

でも・・・もう、できないよ・・・。

涙で目の前が見えなかった、

それでも走った、何もかも忘れたいから、
いつものように、我慢して、笑う事など、到底できなかった。

まてつて!!

・・・何か聞こえる？

まて！珠！

・・・うそ？

「おい！」

要が、珠を後ろから抱きしめた。

「せ？先輩？何で？」

「・・・お前が好きだからだよ！バカ！」

いつもクールな先輩が、その時だけ別人のように、真っ赤だった。

「お前の事好きだから！お前のその笑顔が好きだから！・・・たのむ、そばで、ずっと笑っててくれよ・・・」

「・・・はい！」

涙は少しだけ止まった、でも、私はまた、笑顔でいることができた。

「・・・うまくいったか」

陽介が要と珠が抱き合うシーンを見て言った。

「ったく、感謝しろよ沖田たち、ややこしそうな依頼、こなしてやつたんだから」

「ご苦労様です」

ふと上から声がする、

陽介は特に驚きもせず答える、

「さすがキューピット、恋人たちが心配で見にきたのか？」

「そうなんですけど・・・知らない心配だったみたいです」

ところが笑いながら陽介の隣におりる。

「・・・寂しくないんですか？」

「ん？誰が？」

「陽介先輩の事ですよ」

「僕？どこが寂しいの？」

「え？そりゃ、麗佳さんと・・・」

「・・・フツ、やっぱりこころちゃんの子供だね」

「え？」

「大丈夫、大人になれば分かるさ、愛って言うのは、目にも見えな
きや触る事もできない、でも感じあうことはできるって事」

「・・・よくわかんないです」

こころがそう言って難しい顔で悩んだ。

一方陽介はいつもの爽やかな顔で空を見上げた。

空は真っ赤だったが、とても明るいものに感じた。

第26話「クール系×けなげ少女後編」(後書き)

さあ、感想評価を是非とも書いてくれ by 陽介

第27話「お別れの始まり」(前書き)

いよいよこの小説も完結に向けてラストスパートをかけています。
最期の最後までお付き合いをお願いします。

第27話「お別れの始まり」

「……こころ……こころ

「……誰？私を呼ぶのは？」

「……帰ってきて！こころ！」

「え？帰るって……どこに？」

「こころ！……お願い！起きてちょうだい！こころ！」

真っ暗な、夢の中で、私は懐かしい声を聞いた。
そして、気付いたのだった。

「……お母さん？」

目が覚めると、私は無性に不安な気持ちになった。
横では麗治さんがまだ寝ている。

「……なんだったんだろ……今の夢……」

私は心の中にある嫌な思いを吹っ切るように、もう一度寝る事にした。

「……なんだか……嫌な予感だする……」

こころはそのまま寝てしまった。

だが、まさかその予感が当たるとは……思ってもいなかった。

学校の屋上

いつものように集まっているメンバー、そしてまた、茜が持つてくる依頼をこなすいつもの日常、ここらにとっては幸せなこの日常が、とうとう、崩れる時が来た。

「ああ、今日も依頼を片付けたし、お金もたまってきたわね」

茜は預金通帳を見ながら笑顔で帰り道を歩いていた。

「さて、明日は誰が依頼に来るのかしら？」

そんな事を言いながら歩いていると、前方に別の高校生男子が、茜に近づいてきた。

服装が他校の制服だったため、かろうじて高校生と認識できたが、正直とても幼い感じのある男子だ。かわいいと表現するのがちょうどいい容姿の男子は、緊張した面持ちで茜の前に立った。

「……何か？」

「あ、あの……キューピットクラブ……の、茜さんですよ？」

「ええ、そうだけど？」

「じ、実は、依頼があるんです」

「へえ、進学校の川貴高校でも有名になっちゃったのかな私達？」

「はい、かなり有名ですよ……天才の沖田さんとか……情報屋の白羽さんとか、陰陽師の飛咲さんとかがいるから……あの、それで、頼みごとがあるんです」

「うんうん、君も恋に迷った子羊なわけだね、ほら、この情報屋の茜ちゃんに言ってごらんなさい」

「……じつは、この子なんですけど」

そう言っただけで写真を取り出した男子学生。

「どれどれ？」

それを見た茜は、一瞬止まった。

「……え？」

写真に写っている被写体、それは、間違いなく、

こころだった。

「あ、あれ？・・・もしかしてこころちゃんを知っているんですか？」

「・・・ううん・・・いや、な、何でもないわよ」

そう言う茜だったが、正直気が動転しそうで慌てていた。

だが、そんな事を気にせず、その男子学生は話をする。

「僕の名前は石岬琥太楼いしみぎこうろうつて言います。そして、この写真の子は加藤ころつていう子で、同じ中学校の同級生でした、そして、僕はその子が好きなんですけど・・・実は、こころちゃんは今・・・病院で今だ昏睡状態なんです」

「・・・事故にでも、遭ったの？」

「はい、覚えていますか？一年ほど前にあった巨大追突事故を？」

知っているわよ・・・だって、麗治とこころちゃんから・・・聞いたんだもん

「彼女はバスに乗車していたんです、その時お父さんとお母さんも一緒でした、でも、事故が起きました、でも、こころちゃん達は重体ではありませんが、奇跡的にも生きてはいました、その後、両親は既に意識を戻したんですけど・・・こころちゃんだけが、今だ、意識を戻さないんです」

「・・・そ、そうなんだ・・・」

「医者は、こころちゃんの意識を戻す方法は、待つしかないって言うんですけど・・・いつまで経っても、こころちゃんは目が覚めないんです。むちゃくちゃなんですけど、でも！あなた方なら・・・どうにかなるんじゃないかって思って・・・」

茜は顔をうつむける、だが、どうすればいいのか、どうした方がいいのか、それは既にわかっていた。ただ、お別れが悲しくなるだけ

なのだった。

「……いいわよ、受けてあげる、その依頼」

茜は、笑顔でそれを見た。

「……ころちゃん……」

茜は、こころの思い出を、振り返っていた。

そして、こころのお陰で、麗治に更に近づけたことを、改めて実感していた。

「……でも、これでよかったんだよね……だって、幽霊なんかより、生きている方が……絶対にいいもんね
そう思っている茜、だが……」。

「……なんで、涙なんか出てくるの……」

あふれ出てくるその寂しい雫は、ぬぐっても、止まらなかった。

翌日、屋上では、こころと麗治だけを除き、全員が揃っていた。

「……こころ、ちゃんか？」

悠里が、茜の話を聞いたあと、驚愕のあまり、立ち尽くしていた。
他のみんなもそうだった。

誰もが、顔をゆがめていた。

「……仕方ないであろう、そんな寂しい顔をするな」
そう言ったのは、はじめだった。

「……むしろ、喜ぶべき事ではないか、こころが、いくなれば生き返るのであるぞ？ 今度会うときは、幽霊ではなく人間なのだ」

「そ、そうですよ！ 生きているって事は、素晴らしい事なんですよ・

・死んでいく時は、みんな泣いちゃうし、寂しい顔もするけど、生き返るのなら！・・・笑顔になりましょうよ！」

麗佳が元氣付けるように言う、それが効果を出したのか、みんなの顔が明るくなった。

「そ、そうですね！・・・お別れなんかじゃない、こころちゃんが喜ぶ事なんだ・・・笑顔で送ってあげないとだめですね！」

悠里がやっと笑う。

「わ、私、やりたい事がありますわ、こころちゃんを喜ばせる事・・・悠里、ちよっと手伝ってね」

「はい、姉さん」

花鈴も涙を拭いて、力強くそう言った。

「麗佳、こころちゃんの魂を肉体に戻す方法は僕が知っている、でも用意が必要だからね、僕らはそれをしようか」

「うん！」

陽介も、いつもの緩んだ表情でそう言った。

「さて・・・我は、麗治にその事実でも告げてやるとするかな」

はじめはそう言うのと、屋上を出ようとした。

「ま、待つてよ、私が麗治に伝えるわよ」

「・・・察してくれ、男同士でしか、話せない事もある」

はじめが、寂しい表情でそう言った。

「・・・すまん、茜、できれば・・・こころを見ていてほしいのだが？」

「・・・わかったわよ」

茜は、それしか言えなかった。

はじめは笑顔になって、屋上を出た。

「麗治・・・ちよっといいか？」

「なんだよ？」

廊下を歩いていた麗治を呼び止めるはじめ、そして、体育館裏に来

るように言った。

体育館裏

「こころはどうした？」

「ん？茜と一緒にどこか行っただよ」

「・・・そうか」

「なんだ？お前らしくないな・・・どうしたんだよはじめ？」

「・・・喜ばしいニュースがあるのだよ」

「はあ？なんだよそれ？」

苦笑いの麗治に、はじめはあっさりと言った。

「・・・こころは、生きている」

はじめのその単刀直入な言葉に、麗治は、理解する事ができなかった。

それでも、はじめは、ゆっくりと真実を語り始めた。

「・・・昏睡状態・・・こころが？」

「ああ・・・つまり、こころは生きているのだよ」

そこで、麗治は、やっと理解した。そして、啞然とした。

第27話「お別れの始まり」（後書き）

登場人物の最後の言葉

茜「今までありがとうございました！またお会いできる日を楽しみにしています！」

はじめ「こんにち今まで苦勞をかけたな、そなた達との出会い、我は忘れないぞ」

最終話 「また、会おう」

麗治は一人である場所へ向かっていた。それは、こころと一緒に行動をすることに決めたあの『キツネ』のいるほこらである。

「おい！キツネ！いるんだろ！」

麗治がそう叫ぶと、キツネは煙のように出てきた。

『なんだい？ぶしつけな登場だね？』

「こころが生きているってどういうことだよ！」

『・・・おや、あの子生きてたのかい』

別段慌てる様子もなく、キツネは少し驚いた顔をしただけだった。

「お前神様なんだろ？それぐらいわかってたんじゃねえのか？」

『神様？まあそれに似てはいるがそこまで偉いご身分じゃないのさ、私の仕事は迷える魂の道を示す、それ以外の事といったら魂の強制浄化程度さ』

「・・・じゃあ、知らなかったのか？こころが生きていた事を」

『・・・まあ、そういうことだね。そもそも幽体離脱をしていたとしても長い間魂が本体に戻らなかったら体は腐って使えなくなるものなのさ、つまり死ぬのと同じ、だからこころは多く見積もっても一年以上体に戻っていない、奇跡が起きない限り体が生きている事なんてないもんさ・・・でも・・・よかったじゃないか』

キツネは、少し嬉しそうな表情をした。

「・・・なんだよ急に？」

『・・・あの子は見た目通り落ち着かない子だろう？私にとっちゃ迷える魂はみんな私の子みたいなもんさ、死後の世界でも立派にやっついていけるか、はたまた地獄か、どうなるかは本人次第ではあるけど、私はその魂たちに手助けができるんだよ、そんな中で、こころほど心配した子はそういない、だから・・・あの子が幸せになれるってのがわかって・・・うれしいのさ』

暖かい目をするキツネ、麗治はそれを見て、なんだか暖かい気持ちになった。

「・・・なあ、こころが生き返ると、オレはもうあんたと会えないのか？」

『ま、そうなるだろうね』

「・・・そうか・・・もしかすると、これが最後なのかもな」

『そうだね、あんたと会うのはこれが最後だろうね』

「・・・あんたには度々世話になったよ、初めて会った時は、あんたと出会ったのが不幸だと思っていた・・・でも、今はまんざらそうでもないよ」

『・・・そうかい』

キツネはいつぞの人型になっていた。

「・・・あんたのその姿も、今日が見納めだな」

『どうかね、あんたが冥界に行くころには、私も格上げされて天使にでもなっているんじゃないか？』

「天使か・・・あんたはどっちかと言うと、やっぱり神様の方が似合っているよ」

『ありがとよ・・・最後に、些細な忠告でもするかな』

「なんだよ？」

『・・・あんたは、こころが生き返ると、死んでいたときの記憶はどうなると思う？』

「・・・え？」

『こころが目覚めた時・・・あの子の中にあんた達と過ごした記憶はないんだよ』

キツネは寂しそうにそう言った。

「麗治さん！どこ行ってたんですか！？楽しいところですか！？私

も連れてつてくださいよ！一人だけなんてずるいです！」

「うるさい！勉強してたんだよ勉強！」

麗治は平常を装って自分の部屋に戻った。

そしていつものように浮いているところ、それが今では普通の日常だった。

「・・・なあところ・・・明日どつかいくか」

「え？なんか新しい依頼ですか？」

「・・・いや、オレの用事だ」

「別にいいですよ！どこ行きます！？」

「・・・思いめぐり・・・かな」

そう言った麗治は、一人で笑った。だが、その笑いはなんだか寂しそうだとこころは思った。

翌日 土曜日

麗治とこころは、初めて二人が出会った公園に来ていた。

「麗治さん！ここ懐かしいですね！一年ぶりくらいですよね？」

「そうそう、あの日お前を見てオレの人生は狂いだした」

「ちょ！なんですかその言い方！ひどいですよ」

本当、変わったよ、お前と出会ってから・・・。

麗治は静かにそう思っていた。

元々要領のよかったオレは、人生の渡り方も上手いと思い込んでいた。

だが、高校へ上がってから、オレと周りに溝ができた。

いつの間にかできたその溝を、越えられたのは茜達ぐらいだった。

正直、その頃から人間関係など必要ないとさえ思っていた、だが、どうも虚しい気持ち、渦を巻いて心にこびり付いていた。

そんな時、お前が現れた。

そしたらどうだ？

いつの間にか溝が埋まっていた。

冷たい印象しか持っていなかった周りの人間が、次第に親しく話しかけてきた。

面白い部活も立ち上げる事ができ、オレの勉強だけの高校生活に、色がぬれた。

お前のお陰で、俺は変わったんだ・・・。

麗治がボンヤリとそんな事を考えていたら、誰かが声をかけてきた。

「よう、天才の沖田」

「こんにちは、沖田さん」

「あ、羨さんに虎衛か、久しぶりだな」

あのスケバンと泣き虫少年だった。

「あんどきや世話になったな」

「全くだ、で？あんだ達今デート中か？」

「えへへー、そうなんですよ！」

「ばっ！バカ！変なこと言うな！」

羨が顔を赤くして照れている、見ていて微笑ましいものだ。

「麗治さんは一人で何をやっているんですか？」

「ん？・・・散歩だよ」

「おいおい、じいさんみたいな事するんだなお前？」

「いや・・・結構いいもんだぞ？外を出歩くつてのは」

清々しい笑顔の麗治、二人はそんな麗治に何があったのかと疑問に

思ったようだが、質問まではしなかった。

「じゃ、僕らデートの途中なので」

「だから！・・・ったく！」

「おう、仲良くしろよ？」

麗治がそう言っただけで送った。

「・・・よかった、仲良くできているみたいですね！」
ところが本当に嬉しそうな顔をして言った。

「当然だろ？・・・お前、がんばったんだから」

「・・・え？」

麗治はいきなり真剣な顔をして、ここにそう言った。

「・・・初めての依頼、お前の野球をしている先輩への説教、そのお陰で、今でもあの二人は仲良くやっているぜ？」

「・・・」

「他にも、アイドルと影薄男の恋もあったよな、あの時の台詞もよかった」

「・・・」

「いじめをしている女子の集団への言葉も、お前の熱意がしっかりと伝わった」

「・・・」

「オレの姉貴の恋の手伝いも、してくれたよな？」

「・・・麗治・・・さん？」

「お前、立派なキューピットになれたじゃん」

最高の笑顔で、麗治はそう言った。
すると、こころは、さっきまで笑顔だったのに、急に暗い顔になった。

「・・・なんで、急にそんな事を言うんですか？」

「・・・」

「・・・私なんて、まだまだキューピットじゃないですよ・・・」

「・・・」

「だって！みんなの助けが必要だもん！茜ちゃんの情報網がないと！はじめさんの陰陽術がないと！悠里君の説得がないと！花鈴ちゃんの優しさがないと！・・・麗治さんがいないと！私何もできないよ！」

「・・・そんな事ない」

「そんな事ある！まだみんなと一緒にいたい！ずっとキューピットクラブを続けていたい！・・・もっと・・・もっと・・・麗治さんのそばにいたい！」

泣き始めるころ、麗治は、辛そうにうつむいていた。

「・・・ずっと一緒に決まってるでしょ！」

ふと、そんな声が聞こえた。

「我らの縁がここで途絶えるはずがなかつ！」

頼もしい、仲間の声がした。

「泣いちゃダメですよ！・・・こころちゃんは笑顔が一番！」

いつも協力してくれる、仲間の声が。

「ほら・・・笑ってください、こころちゃん」

共に助け合った仲間の声が。

「僕達の名前がないぞ？忘れちゃあ困るぜこころちゃん！」

共に笑いあつた仲間の声が。

「こころちゃん・・・生きて！また会おうよ！」

最高の、世界に二つとない、仲間の声が。

「お前ら・・・」

公園には、茜をはじめも悠里も花鈴も陽介も麗佳も集まっていた。

「・・・みんな・・・」

「ほら、泣かないの！泣いたら・・・泣いたら・・・お別れみたいじゃない！」

既に泣いている茜が、力強くそう言った。

「こころ、お主は生きておる・・・生きておるのだから・・・生きねばならぬ」

いつもの優しい笑顔が、そこにはあつた。

「こころちゃん、生きている事知つてた？」

悠里が涙を拭きながら、笑顔で聞く。

「・・・夢で、お母さんの声がした・・・その時から、生きているかもつて思つてた」

「お母様が呼んでらしたの？だったら・・・早く元気な顔を見せないと！ですね！」

花鈴が涙目で、元気を振りまきながら言った。

「僕らはいつでも待っている！・・・だから、早く生き返ってこつちに来い！」

陽介がかつこつけながらそう言った。

「生きている事が、一番の幸せだから！・・・私の分まで生きるためにも！しっかり生き返ってね！」

麗佳は優しい表情でそう言ってくれた。

「みんな・・・」

「・・・こころ」

こころが振り返る、すると、麗治が珍しく涙目だった。

「・・・生き返って、また会おうな」

「・・・記憶、無くなっちゃうのに・・・またみんなと会えるのかな？」

「バカ・・・どっからそんな話聞いたんだよ？」

「聞かなくなつて・・・みんなの行動を見ればわかるよ・・・また会おうなんていつているのに・・・みんな泣いてるじゃん・・・隠すの下手だぞ？」

「・・・別に、隠しているわけでもないし、記憶が無くなるわけがない！・・・だから！また会えるんだよ！・・・わかったか？」

「・・・わかった・・・また会おうね・・・私！会いに行くから！！！」

ゆつくりと、心の体が透け始めた。

「こころが帰ろうと思ったから・・・魂が体に帰ろうとしている」
陽介がそう言うと、こころは、笑顔になった。

『 絶対 会いに行くから 』

こころはそれだけ言つて、歸つてしまった。

「・・・あちゃー、これ渡しそびれちゃったよ」

悠里が涙を拭いながら色紙を取り出した。

「なんだそれ？」

「・・・依頼人達のお礼の言葉・・・無理言つて書いてもらいました」

「ほう、それは我々の宝でもあるな」

はじめが面白そうにそう言つた。

「・・・当たり前よ、それに・・・こころはまた会いに来るんだから！それまで私達が預かるの！！」

茜が止まらない涙を抑えながら、そう言つた。

数時間経ち、公園には二人だけとなった。

そう、茜と麗治の二人だ。他のみんなは、ゆっくりと歸つて行つた。

「・・・寒いわね、さすがに夜は冷えるわ」

「全くだ」

二人は特に何かをするわけでもなく、公園のブランコに座っていた。

「・・・こころちゃんがいなくなつて寂しい？」

「・・・まあ、部屋は広くなるな」

「・・・ねえ、また、こころちゃんに会えるかな？」

「・・・あいつが会いに来るって言つてんだから・・・来るだろ？」

「・・・どれぐらいで来るかな？」

「・・・さあな」

「・・・」

「・・・」

二人は黙り込んだ。

「なあ」「あのさあ」

二人の声が重なる。

「・・・なんだよ？先にどうぞ」

「そ、そっこそ、お先にどうぞ！」

「・・・いいんだな？」

「・・・な、なによ、いいわよ」

真剣な顔になる麗治、茜はそれを見て赤くなる。

「・・・オレさ、ここから学んだ事が一つだけある」

「な、なによ？」

「素直さは大切だつて事」

「・・・だ、だから？」

「オレ、お前の事が好きだ」

麗治は表情を変えずに、茜を一直線に見て、そう言った。

「・・・わ、わわ、わわわわたしだつて！麗治の事好きなんだから！！」

真っ赤になる茜、そして強烈な返事をされた麗治はニツと笑った。

「・・・さて、帰るか、送ってやるよ」
「・・・うん」

月が照らす道路を、二人は歩いて行った。

数カ月後

みなさん、どうも！悠里です！

大分月日は経ち、僕らもいよいよ進級して二年生になりました！

こころちゃんがいなくなてからも、我らキューピットクラブは存続し、今でもこころちゃんの帰りを待っています！

あゝあ、こころちゃん早く来ないかな？

「悠里よ、何を独り言をしているのだ？」

「い、いや、別に・・・なんでもないです」

いつもの屋上に、いつものメンバー！

「全く、家業を継いだワリには毎日よく学校にこれるな？陽介先輩？」

「はっはっは、卒業したってOBになれば学生同様！僕はまだ現役さ！」

「な、何の現役なの？ようくん？」

麗佳が心配そうにそう言った。

「あら、もうすぐ依頼が来る頃ですわね」

花鈴がそう言つと、丁度よく扉が開いた。

「みんな！依頼よ！」

そんな日常が、これからも続く。

とある日

「つたく、はじめのカラオケ好きはどうにかなんねえのか？」

麗治が夕刻に、のんびりと帰り道を歩いていた。

「……つたく、いつになったら来るんだよ？」

「誰がです？」

「んあ？……幽霊なのにキューピット気取り、のあいっだよ」

麗治は後ろから投げられた質問を、振り返りながら答えた。

「……おかえり」

「
ただいま！」

終わり

最終話「また、会おう」(後書き)

次回、めちゃくちゃ長いあとがきで最後なので、ぜひ読んでいただけると嬉しいです。

こころ「みんな！今までありがとうございました！」

麗治「ここまでのご愛読、本当にありがとうございました！」

あとがき

いかがでしたか？

つつてもこの小説だけれも評価してくれなかったからなあ・・・。

本当の意味で寂しいあとがき

正直、この小説を終わらせた事にめちゃくちゃ後悔があります。
もっと長く続けられたらうに、もっとネタがあっただらうに・・・。

でも完結しない作品は嫌いなので・・・泣く泣く完結させました。

実は、この作品が私アツラのこのサイトへの初投稿作品です。

なのに全然受けなかった・・・読者数だって一ヶ月でやっと1000人だったかな？

でも・・・正直めちゃくちゃ楽しかったです。

自分の作品を多くの人に見てもらえるってのは感動ですね、

それゆえに、この『幽霊なのにキューピット気取り』にはやはり思い入れがありました。

この作品って、何となく少女漫画っぽかったかもしれませんが、
そうでもないか？

自分なりには男女関係のないジャンルだと・・・いや、そうでもないか。

でもやっぱり在り来たりなところもあつたかもしれませんね。

でも登場人物たちのコメディー展開は結構好きです。

いうなればコメディーをほとんど書いている自分の原点がここですね。

あー、あと言う事あるかな？
……ないかな。

この作品がここで終わってしまうのは本当悔しい気がします。

つてことでいつか出版社に持ち込んで漫画化なりアニメ化なり文庫化されることを夢見てます。

それで、本当に大きな舞台でこの作品が出てきたら、

ぜひ！応援よろしくお願いします！！

あと、今かなり人気のある 自分で言っちゃったよ

『ザ・タイプパニック』

ぜひ読んでいただけると嬉しいです。

さて、この作品とはお別れですが……。

多分登場人物は他でも使いまわします！

ほら、多分この作品が一番キャラクターの名前が出ていると思うんですよ、

作者だって名前を無尽蔵に作り出せるわけではないので、

同姓同名のキャラを見かけたら、とりあえず親近感を持っていただけると幸いです。

こんなどうでもいいようなあとがきを読んでもうださった皆様へ、
そしてこの作品を最後まで読んでくださった皆様へ、
作者より、心の底からお礼を言わせていただきます。

本当に、ありがとうございました！

これからの執筆もぜひ応援してください！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5108c/>

幽霊なのにキューピット気取り

2010年10月22日00時16分発行